
LOGOS EX MACHINA

高橋和絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOGOS EX MACHINA

【Nコード】

N0374D

【作者名】

高橋和絵

【あらすじ】

申し訳ありませんが、諸事情により更新を停止させていただきます。

三木伸照 a (前書き)

手に取っていただきありがとうございます。御座います。

後書きなどはテンポを落とさぬよう一定の間隔で挟みたいと思います。

また、一部残酷な描写、場合によっては多少性的な表現などを含む可能性もありますので、

そう言った描写の苦手な方はご注意ください。

それでは気に入っていただけるかは解りませんが、どうぞお楽しみください。

三木伸照 a

私たちは、きっと騙されている。
何かって、それは全てに。

日々の喜び、悲しみ、そして生きていること。

確実だと思っていた何かは、気付けば空疎な幻で、
信じていたことは、結局は何かしらの欺瞞。

彼らは見えないけど、何時も、何処にだって、すぐそばにいて、
私に溶け込み、あなたに溶け込み、常に世界を回している。

だけど、わたしたちは、そんな彼らがダイスキ。

彼らがいないと、生きていることすらも感じられないカモしれない。
そんな中、そんな世界、あなたはどう生きる？

私は既に、騙され、欺かれ、彼らナシでは生きることができないか
ら。

あなたは、こんな中、こんな世界で、どうやって生きていく？
こんな、ニセモノだらけの世界で。

— LOGOS EX MACHINA —

呼吸をするのもメンドクサイほど暑さ、

鬱になるほどに泣きやまぬ蝉たち。

毎年のことだが、本っ当に嫌になる。

何故四季があるのか、何故気温が変わるのか、
そんな当然のことに腹を立て。

知ってどうするでもなく、ただ恨み続けていた。

そんな生き苦しい日々を突き抜けるように、
1つの告知が、ネット上になされた。

俺の名前は三木伸照。

年齢18歳。

誕生日は11月20日。

高校三年生。

東京都在住。

部活は情報処理部。

趣味はネットゲー。

好きな動物は犬。

一部は、ブログにも載せている俺のプロフィール。
だけど、そんなモノには誰も興味を示すことはない。
たいていの場合はそうだ。

価値のあるプロフィールなんてモノは精々芸能人か、
人気のあるゲームやアニメのキャラクター。

それ以外は、全てその他大勢だ。

そして俺は、紛れもなくその他大勢であり。

俺もその事実を自覚しているつもりである。

いつからか世界は、自分中心には回らなくなった。

そして俺は、決して主人公なんかではなかったのだ。

気がつくとも朝日が昇り、小鳥がチチチっとさえずる。
目の前ではP Cがスタンバっており、
そこまで来て俺は寝オチしていたことに気付いた。
画面の中には……ネトゲーの俺、仮初めの俺がいる。
高価な武具を装備し、容姿に優れ、
身体能力に優れ、高い知力を持つ。
何も欠けることのない、そういった完璧な俺。
ゲーム上の俺はまさに勇者的な存在であり、
それこそ、本物が負けるほどに、模範的な姿であった。
デジタル情報と張り合った事に虚しさを感じつつも、
現実の俺はそれ程に、何の魅力もない存在なのだった。

今は夏休みだ。

行く場所も、ヤルこともない俺は、
カチカチカチカチ、と日がな一日ポリゴンの虚像に身を預け、
ひたすらに剣を振っていた。
研ぎ澄まされたグラフィックは殺伐とした世界をリアルに描きだし、
大抵の敵は一閃の下に崩れ落ち、アイテムを残して消えていく。

『お……レバ剣だ』

と略された魔剣レヴァンティン。
初めは喜びに満ちていたレアアイテムも、既に6本目となり、
もはや楽しくてやっているのかどうなのかも、解らなくなっていた。

毎日を消費し、持て余すだけの生活に疑問は抱きつつも、
既に自分の努力だけでは、どうにもならなくなってきた。
ゲームも、この生活も、ひと思いに止められたら、そう思うコトも
時々あった。

だけど、どうしても、止められないな。
カチカチカチカチ、操られるように、

カチカチカチカチ、まるでひとりで。
俺は自動的に、毎日を繰り返している。

カチカチカチカチ。

カチカチカチカチ。

そこに蟬の声も混じり、更に俺の耳をなで回していく。

カチカチカチカチ。

カチカチカチカチ。

『あああーッ！！？』

ふと、気だるさと、溜め込んでいた何かがある一線を越えた気がした。

俺は、ひと思いに電源を落とし、ガックリともたれかかる。

何を、こんなにイライラしているんだ。

何が、こんなに荒立てるんだ。

頭の中が、麻痺したように、だけど、熱を帯びていて。

ナンドろうか、煙でも吹き出さんばかりに、

何か爆発してしまいそうに、

それでいて、その気配などまったく見せず、ひたすらにくすぶり続けている。

『あ、あ……部室』

そうだ。

『部活にでも……行くか』

部室にも、パソコンしかないのにな。

学校は、夏休みでもある程度の活気を保っていた。
受験のため補習に来るモノ、面接の練習をするモノ、
俺にはもはや、関係のない話になりつつあったが……。

大体、誰も彼もが何か目的を持って受験に臨むハズは無い。
その多くは夢もなく、目的もなく、宙に浮いた状態なハズなんだ。
己を定める場所が欲しくて、所属を失う喪失感に恐れて、
とりあえずの現状維持を続ける。

俺にはそんな気は、サラサラなかった。

後ろ向きなのも認める、多少斜に構えているのも認める、
それが少し格好いいような、そういった気がするのも認める。
だけど、俺は俺で、それなりのスタンスを持っているつもりでは
いるんだ。

全て分かっている、そうやってるんだ。

部室には、誰もいなかった。

活動目標が希薄な我が部からして、当然と言えば当然だし、
ましては夏休みになってまで来る奴がいるかと思うと、答えは決ま
っている。

それでも、同類が群がる肥溜めのような部活だ。

日誌には俺のようなヤツが記していた、
日々の鬱憤、気怠い現状、ゲームの攻略状況、家族のグチ、先生の
グチ、近所のおばさんのグチ、中には受験のグチ、そんなモノが羅
列されていた。

俺もこのどうにもプラスな部分が見えない日記に、己のグチを書き
付け、

とりあえずは関連団体からのメール処理でもすることにした。

細長く、狭い室内には活気に溢れた夏のヒザシもさし込まず、
気が狂うような蝉の音色すら遠くに聞こえた。

湿ったような、曇ったような、何か周囲との隔たりを置いたような、

そんな心地よい空気を、自然と作り出している。

心地よく滑り出すPCの駆動音に、

先ほどまでの憂鬱は少しばかり影を潜めて見えた、

そして、その中にそれはあった。

k u m e — m a s t e r @ d 3 — f r e e m a i l

日常に飽きたあなたへ

……？

迷惑メールだろうか？それは見たことのないアドレスだった。

他の部員宛かもしれないし、迷惑メールの可能性も高い……、
どちらにしても開かない方が当然無難だとは思う。

だが、だけど……俺はそのありきたりな誘い文句にひかれていた。
別に、見るだけならタダだろう。

ちよっと、ちよっとだけだ。

ほんの少し、メールを見るだけだ、タダそれだけだ。

そして、半ば無意識的にカーソルが動いてゆく……。

— f r e e m a i l

差出人… k u m e — m a s t e r @ d 3

送信日時… 2 0 3 5 年 5 月 1 6 日 1

3 .. 1 4 .. 0 9

“ 殺し合いをしませんか？ ”

殺し合いを、しませんか。

それは、俺の日常にはあまりにも刺激的な誘いだった。

そのメールには信じがたいことに、殺し合いのゲームをしよう、そういう旨の告知が記されている。

当然イタズラの可能性もある、と言うか十中八九イタズラだと思う。

しかしながら、いつもとは違う異質な内容のメール。
日常にはない、異常なメール。
それだけ、たったそれだけで俺の生活は刺激を受け、更には潤って
いくような気すらしていた。

“我々はユビキタスネットワーク回線を使用しての、
全国から集められた21人での
殺し合いゲームを企画しております。

正直の所、疑われる方がほとんどだと思われませんが、
我々はこのイベントに対し長年の準備を進め、
また多額の費用を投じ、システムを整えて参りました。
そして今回、めでたくこの告知を出すに至りました。

具体的な内容としてはネットワークゲームをイメージした仮想空間
をネットワーク上に構成し、
そこで殺し合っていたきます。
細かい参加規約やルールについては添付されたファイルをご覧下さ
い。

また、今回のゲームの勝者には、
ネットワーク上という限定はあるものの、
全てが思い通りとなるあなただけの世界をプレゼントいたします。

参加希望者は空メールを送信していただければ、
ゲームへのアカウントを送信いたします。

（本文があるメールは自動的に弾かれますので、必ず本文のない空
メールを送信して下さい）

また、参加者はログイン定員21名に達した時点で、募集を打ち切るのでご了承下さい。

また、メールでのご質問などには応対しておりませんのでご注意ください。

最後になりますが、我々は本気で今回のイベントに臨んでいます。ネットワーク上での死は現実での死と直結いたします。

その事を踏まえ、参加の際は十分なご検討をなさってください。

それでは皆様のご参加をお待ちしております。”

俺はすぐさま添付ファイルを開き、内容を確認する。

ページが開かれるまでのわずかな時間さえ、あまりにも長く感じられてしまう。

マウスを操る手がカタカタと小刻みに震え、

体中から汗がにじみ出し、喉はカラカラに乾ききる。

説明を見る限りでは、イタズラにしては出来すぎている。

もしかすれば、このゲーム、本当かも知れない、

この殺し合いは、実在するかも知れないのだ。

俺はメールと添付ファイルをメモリーにコピーしPC上のデータを消去した。

辺りが見えない程の興奮が身体を駆けめぐり、しかし、不思議なまでに頭の中は冷静だ。

とりあえずこの場を離れよう、考える場所なんていくらでもある。家へ転がり込んだ俺は、鍵を閉め、ベッドへと突っ伏し、先ほどの

内容を頭の中で巡らせた。

いまだに信じられないが、とりあえずはメールを読んだことは事実であり、あのメールの存在は紛れもない。

何を確かめるためでもない、強いて言うとう宙に浮いたままの現実味を確かめるため、俺は再び規約に目を通していた。

意味もなく、何度も、何度も、規約を読み返す。

何時間も。

後に気付いたことなんだが、自宅のPCにも同様のメールが送られていた。

そう、少なくともこの告知は特定個人に出されたモノではないようだ。

そして、この様子だとかかなり無差別的に、かつ広範囲にこの告知はなされているようである。

定員21名……迷いがそれだけ選択肢を狭めていく、コレが嘘でアレ、本当でアレ、ログインしなければ何も始まらないのだ。

ログインしなければゲームは始まらない、死ぬこともない。

誰だって、こんなすぐには決断できないだろう……。

取り急ぎ俺は、先ほどのアドレスにメールを送信しアカウントを取得することにした。

程なくして一通のメールが帰って来る、ここまでは、全て、本当なよう。

接続先の回線、そのパスワードもシッカリと記されており、現実味だけがゆっくりと、だが着実にその濃密さを増していく……。

そうだ、まずは様子を見よう。

もう少しだけ、様子を見てみよう。

俺は恐れているのだろうか？

いや、恐れていなければ、おかしいだろう。

だって、コレが全て本当なら俺は、死ぬのかも知れないのだから。

結局その日の晩は眠れなかった。

寝ようとはしたのだが、この日常を一瞬で終わらせられるパスポートを手に入れ、寝ていられるヤツの方が正直おかしい。

今までの生活を全て捨てて、新しい世界に飛び出せるか、いきなり訪れた一生の選択が、脳裏にこびりついて離れなかった。

『お、おにーちゃん？ ご飯だよ？』

そうして、何をするでもなく朝が来た。

いつもの食卓だ、母の包丁の音がトットと耳を叩き、父が美味しそうにみそ汁をすすする。愛犬が妹にじゃれつき、妹もいつものようにケラケラと笑っている。

そう、見飽きたいつもの光景だ。

洗濯機がごうんごうんと動き続け、

外を配達バイクが走っていく

テレビからは朝のニュースが流れ……………て……………っ？

俺の動揺を父がすくい取る。

『ああ、このニュース、知らなかったか？ 昨日の夕方からこの話題でヒツキリなしだったけどな、物騒な話だよなあー』

と、父はタクアンをしゃぶりながら、テレビの音量を上げた。

『おかげでウチの部署は徹夜だったよ、現状じゃイタズラだって線が有力なんだがな、規模が規模だし、どうやらアカウントの存在は本物らしいから……………なんだ、有事に備えていろいろと対策をとってるそうだよ、問題のメールの方も使用不可能にしたそうだ』

ダイジョブ、大丈夫だ。アカウントは……………既に持っている。大丈夫だ。

単なる家族との会話のハズが、心臓が千切れそうに唸っている。
ダイジョブだろ、取り乱すな、家族にバレるなんて、もってのほかだ。

『そ、そう……父さんも大変だね、あつと、俺部活でちよつと集まりあるから、急ぐから、さ、今日はちよつと朝はイイや……』

『そう？ 昼は』

『ん、コンビニで何か見繕うよ』

そうだ、もう迷っている時間はない。

学校で決断をつける、それしか道はない。

俺は部屋に戻り、メモリーをにぎりしめた。

『おにい……ちゃん？』

『ん、どうした？』

『あ、い、いや、な、何でもないよっ？ ごめんね、えと、ぶ、部活動頑張ってるね』

『あ、ああ……？ それじゃあ、行ってくるな』

そして、結果的に言えば、俺が家へ戻ることはもう無かった。
震える手がログインをクリックし、
俺の存在は、この世界から消えた。

別に、殺人に対しての憧れがあつたわけではないんだ。

退屈であつたにせよ、其処までの不満が日常にあつたわけでもない。

それでいて、何でこんな、自分の命すら脅かすようなゲームに参加したのか、

正直なところ衝動的でもあり、言葉での答えを表すのは難しいかも知れない。

カッコよさそうだった？

楽しそうだった？

目立てると思った？

主役になれる？

全てが答えのようであり、違うような気がした。

ただ……タダ俺は、大人ぶりたかったのかも知れない。

死というモノに触れ、超越することで、己を崇高化したかったのかも知れない。

子供だから関係ない、そういった解釈から逃れたかったのかも知れない。

全て、すべて分かっているつもりだった。

大丈夫なつもりだった。

無数のフィクションや、映像メディアを通して、

死なんてモノはいくらでも流れ込んでくる。

だからもう俺は死というモノを知っている、分かっているつもりだったんだ。

知っていることを見せつけ、ありふれた”その他”ではない。

己の存在を見せつけたかったのだ。

その決断を後悔するのは、勿論、そう遠いことではなかった。

三木伸照b

部室に駆け込んだ俺は、荒れる呼吸を押さえ込みながらドアへもたれかかる。

息も絶え絶えにやることを確認し、とりあえずドアにCLOSEの看板を掛けた。

部室には誰もいない、学校が空いた直後だ、ソレも当然だろう。

今日は土曜日、補修なども無く、校舎内にイルのは日直の教師ぐらい、

校庭は部活の学生だけだ。

と、俺は扉に鍵をかけ、漫画やら何やらがつめられた本棚を扉へとなぎ倒した。

少しばかり壁を削って、雪崩のように本が崩れ落ち、そして扉は塞がれる。

これで、これでしばらくは誰も入れないだろう。

これで、ダイジョブだ……大丈夫。

いつもの椅子へと腰掛け、PCを立ち上げる。

夏の朝は蒸し暑く、いつもは涼しいハズの部室も、まだ昇り切らぬ低い太陽に照らされ、

むしむしと、居心地の悪い空間となっていた。

物静かな部屋にPCの排気がヒトキワ大きく響き渡り、

それはゆっくりと、俺の中にまでも吹き込んで来るようだった。

とりあえず俺はカーテンを閉じ、ヘッドフォン型のコネクタを取り

付け、脳とネットワークが一直線につながる。

メールにあったアドレスからゲームのページへと飛び、
入手したアカウントでログイン画面へと進んだ。

それでもう、ログインの準備は全て整ったのだが、
それでもまだ、唯一整ってないのはいわゆる心の準備。

学校へ来る途中も必死に考え続けたモノの、それらしい答えは出ず
にあっと言う間にココまで来てしまった

今しかない、決断のタイミングは今しかないんだ。

日頃のイライラは不思議となかった。

今なら、止めることだってできるだろう。

さあ、決断しよう。

何故、俺はこのゲームに惹かれたのか、そして、本当にソレを望む
のか否か。

もう一度、何でこんなゲームに惹かれたのかを考えるのだった……
……………。

今まで聞こえたことが無いもの、そういうものが色々と、聞こえ
てきた。

今まで、蔑ろにしていたモノ、気付かなかったモノ、そういったモ
ノが聞こえ始めた。

ゆっくりと蝉の鳴き声が、響き始め、それに呼応するかのように、

全ての音が、鮮明になっていく。

大丈夫だ。

大丈夫。

俺は分かっているはずだ。

五月蠅いだけだったハズの蟬の音が、少しだけだけど、愛おしく感じた。

そして、結果的に俺が家へ戻ることはもう無かった。

震える手がログインをクリックし、

俺の存在は、この世界から消えた。

ログインした瞬間、世界は滲むように掻き消えた。

はじめは絶叫を伴う急速な落下、

そしてどこまでか落ちた後は、俺の体は宙を漂う。

足場が無いという奇妙な浮遊感、今までに感じたことの無い感覚が全身を包んでいる。

感覚が麻痺している、とても言うのだろうか、
なんというか、驚きも、恐怖も、感動も、そういったものは一切浮かんでくることは無かった。

時折視線を横切るフラッシュが、電子の世界と言うものを感じさせ、ここはもう、俺のいた場所ではないのだ、と、少しさびしげに、そしてマザマザと、告げているようだった。

ヒトキワ大きなフラッシュが耳と目とを貫く、
そしてそれが合図となり、俺は新たな世界へと降り立った。

《ダウンロード中です……しばらくお待ちください》

俺は、何も無い世界に立っていた。

宇宙が出来る前は、こんな感じなんだろうか。

それほどに何も無く、かつどこまでも広がっている。

足場こそ見えはしないが、見渡す彼方には闇の地平がうつすらと横たわっていた。

そして……そこに浮かぶ宙に書かれたメッセージ。

SF映画とかで見るような、光る板が浮いているような、そんな感じだ。

世界は一定のタイミングでカリカリという音を響かせ、電子光が尾を引いて飛び交う。

周囲は真っ暗だが、光の位置が広がっていく空間と呼応していて、その空間の広がりとは視覚的に捉えることが出来た。

雰囲気や、気温こそ異なるものの、何故だろう音や空気はログイン前の部屋とどこか似通っているような気がする。

《…………ダウンロードが完了しました》

さて、どうなるのか、と様子を見てみると新しいメッセージボードがゆっくりと降りてくる。

《ゲームへのご参加、まことにありがとうございます。あなたは『8』人目のプレイヤーです。プレイヤーの氏名および性別を入力してください、またHNの使用も可能です。》

女性のアナウンスと共に、入力用…なんだろうな、同じく光るキーボードが降りてきた。

特に気にするでもなくHNを入力しかけ、その名前を思い出しふと後悔する。

殺しあう相手……他の参加者への体面を考えるのも変な気はするが、まあ、最低限の体裁は守っておきたいのも仕方が無いことだろう。

《JOBを選択してください、なお、ゲーム中の変更は不可能です。》

作った側はほんとにゲーム気分らしいな。

宙には俺を囲むように14枚のプレートが現れ、それぞれにSORCERER、ARCHER、と言うようなRPGゲームを意識したような職業が記されている。

参加者は21名……つまりは早いもん順ってことか。

すでに無いプレートにはどのようなジョブあったのだろうか、気にはなるが、まあ、たぶん、強そうなんだと思う。

『まあ……やっぱり』

ナイトだろうな。

剣を携えた、騎士のジョブ。

ネットゲでは使い慣れ、とりいそぎカッコよさそうではあった。

それがまあ、似合っているかどうかは別問題だが。

その後も武器の選択、パラメータの割り振り等、まるでゲームをするような選択が続く、その様子はそれこそ普通にゲームしているようで、最終的には俺もいささか楽しんでいた。ルール等の説明はされる様子はない、つまりは殺り方ご自由に、ってことなんだと思う。なかなかどうして、趣味の悪い連中だと思う。

《服装を選んでください。》

男性用女性用それぞれ30種類ぐらひはあったと思う、いろいろと、まあ、シラフで着るには恥ずかしいモノも含めて。

設定も終盤に差し掛かり、この先に待つ展開を思うと急に熱が冷める気がした。

そう、これが俺の……。

『死に装束、かもな……』

なんか知らないが、無性に腹が立った。

見えない足場を踏みしめ、立ちすくんだ。

まあ、だけど、もう遅いんだ。

《以上で設定は終了です。ゲーム開始後の修正は出来ません、確認および修正をしますか？》

『……いいえ』

《それでは、ただいまよりゲームを開始いたします。》

ゆっくりと世界が色を帯び、大地には土が敷かれ、木々が茂り始める。

感触は、紛れも無い現実であり、5感全てを、作り出される世界が満たしていった。

空が広がり、雲が浮かび上がる、

そして、最後に俺の体を光が包み込む……。

何かが流し込まれるように、そして何かが流れ出るように、気づいたころには俺の体格、衣装、髪型など、それら全てが変わっていた。

そうこれが、この世界での俺。

いままでの、俺ではない俺。

《それではご健闘を……》

《そして》

《……御免なさい》

その声が、俺にとどくことはなかった。

もし、この声を聞けていたのなら、俺は彼女の想いにも気づけたのかも知れない。

もし、この声を聞いていたのなら、あんな結末は迎えなかったかも知れない。

まあ、どちらにせよ、全ては手遅れだったケドな……。

そう、全ては手遅れだった。

メールを見たとき？

アカウントを取得したとき？

ログインしたとき？

ちがう、そうではない。

もっと、このゲームが世に知れるもつと昔から、このゲームは始まっていたのだ。

社会の裏側で育ち続けていたこのゲームは、長い時をかけて歪み、狂い続け。

そうして、その歪みが臨界となり吹き出した。

全ては、手遅れであり、失われたモノは1つたりとも帰ってはこない。

大丈夫なコトなんて、何一つ無かったのだ。

《『三木伸照』がログインしました》

こうして、俺達のゲームは始まった。

決められた結末へ向けて、まるで、ゲームのように。

三木伸照 c

鳥が羽ばたき、
風が木々を揺らす。

世界は動き出し、俺たちの殺し合いも始まった。

『7本目か』

俺の手に握られていたのはレバ剣ことレヴァンティン。

ゲームにはプレイヤーのジョブにあわせた武器、つまりは凶器が与えられ、

コレと言った指示もなく俺は木々茂る森へと投げ出された。

なんでまたレヴァンティンなのかと言うと、

まあ、特にこだわりや愛着があるわけではないのだが、せっくな
ら使い慣れた武器で戦いたいと、そーゆー気持ちが多量なりともあ
った。

北欧神話の巨人、スルトの持っていたとされる武器だ。

世界を焼き尽くしたと言われる剣とも杖とも言われた武器、その模
造品はいささか質素と言うか、なんと言うか……。

『ずいぶんおとなしい感じだな……』

その刀身は剣と言うより、どちらかと言えば杭のような棒状のモノ
で、

先端こそトガっているものの、正直に言うとか剣と言う印象はあまり
無い。

数回振り回してみるが、どう考えてもタダの金棒である。

取りあえずは杭を鞘に収め、自分が出来ることを確認していく、
地面を踏み、手首を回し、ジャンプし、そして、しゃがむ。

数値化されたステータスはどうにもイメージしにくいのが、確かに身

体能力等は現実世界のそれよりも高い……殺し合いに向いている気がした。

もっとも、現実で体を動かすコトなんてそうそう無かったため、今の爽快さは現実のそれとは比べモノにならないだろうが。なんとなく準備運動などをしつつ、この体の感触を確かめる。

『よし、大丈夫、ちゃんと動く、な。ダイジヨブだ』

この体はどこまでが本物だろうな、と、そう考えてる自分は確かに本物なんだろうが、そう思うほどに全てが別物にすり替わっているような、そんな感じがした。

まあ、事実、顔と頭以外は本物とはまるで違うのだが……。

さて。

想像していたキリングフィールドは思った以上に穏やかで、

木々が生い茂る木漏れ日の空間だった。

ほかの参加者はおろか、モンスターののようなモノも設定されていないように、

物静かな森林に降り注ぐ、クリーム色の光りにつついアクビがこみ上げる。

そういえば、昨日は寝ていなかった。

眠気すら引きずるこのリアルなゲーム空間には、妙な違和感すら感じてしまう。

まあ、とりあえず腰を落ち着けよう、

こんな状態で襲われてもロクな対応が出来ないのは目に見えている。周りから目立たない場所、そういった場所を探してドサツと座り込み、

脚を放り出してマブタを擦る。

身体を撫でた草の感覚も、本物と何ら遜色はなく、草の匂いすらも、うっすらと漂ってくる気がした。

とりあえずは昨日から続いた気疲れも、結論を出した直後にこんな

形で一息つけるとは思わなかった。

そうして俺は、再び大きなアクビをひとつ、真っ直ぐ伸びをした後に、いつもより重いマブタを押さえるのをやめた。

もしもの事を考えると熟睡こそできなかったが、気付けばつらつらと意識は傾いていて、

危ういところで、完璧に眠りこけるところだった。

虫や、小動物など、リアルすぎるこの世界の住人が、俺の近くでカサコソと動き回り、

その一部はカラダへとまとわりついている。

慌てて体を起こし振り払っていると、その絶え間ないガサゴソに1つ大きなモノが混ざって聞こえる。

それは決して動物のソレではなく、
ましては虫のソレでもない、

サッサッサッサッサッサッサ

間違いない、それは歩みを進める、人の音。

サッサッサッサッサッサッサ

草をかき分ける、人の音。

サッサッサッサッサッサッサ

血の気が引き、身体は固まった。

サッサッサッサッサッサッサ

早速来たのだ。

ココにいては、このままココにいてはいけない。

俺は四つんばい地を這って、草むらの中へと身を隠した。

先に気づけたのは幸運だった。

相手はまだ、こちらには気付いていないようだ。

それどころか、こちら辺に人がいるとは思っていないのかも知れない。

足音は、ゆっくりと近づいては来るが、それはただ、不気味なだけで、コレといった敵意や、殺意みたいなモノは、放っているようには感じられなかった。

こっそり、バレないようにコッソリと、草むらから様子を見る。

そこには、一人の男が、左右を確認しながら、歩を進めていた。

不思議な、と言うか奇妙な男だった。

武器はここからでは判断が付かない。

肌はこけていて、首もとには皮がたまり、何というか、太った男が贅肉を抜き取られたような、

そんな体格をしている。

髪は薄くなった短髪、外見から見てとても年で薄くなっているようには見えなかった。

そして最も目を引いたのは目の下には深いクマ……。

ノソノソといった歩みと合わせても、

それはあまりにも、不気味な姿だった。

男の接近に合わせて、俺の心臓は、どくどくと、その拍動を高めていき、
それに伴い……、
伴い……？

『何だコレ……！？』

杭が、鞄に刺したままのレヴァンティンが発熱していた。
その熱は、鼓動に合わせて脈を打つように燃え上がり、
火の粉をチラして、その身が赤く染まる。

『マズ………ッ』。

男は、ゆっくりと近づいてくる、ヤバイ、このままでは、見つかる。
痩せこけようと相手は大柄だ、正面から戦っても勝てる見込みは……
あまりない。

現状が、俺の拍動を更に高めていき、
ソレに呼応するかのように赤黒く色を変えた杭は鞄を焼き切り、
パチパチと、音を上げて周囲を焼いていく……。

男は、何かを嗅ぎつけたのか、歩みを止めた。
そして、辺りを見回している……。

俺には決断が迫られた。
大丈夫、コレはゲームだ。ダイジョブだ。
相手はまだ気付いていないんだ。
先手を取れる今しか……今しかないんだ。

そう、今しかないんだ、今しか、今しかない。

いま、この瞬間しか、気付かれていないこの瞬間しか、殺せるタイミングはない。

先に、先に相手の背中をとり……殺す、しかない。

今なら行ける、今なら行ける、今なら行ける、今なら行ける。

今なら、今なら、今なら、いけ、行ける、今なら行けるッ！

暗示をかけるように自分の中で繰り返しつつやき、

そうやって恐怖とか、その他罪悪感とか、

浮かび上がる全てのモノを消し去っていく。

柄にまで染み通った熱が、手を黒く焼き、匂いを立てる。

仕方ない、仕方ないじゃないか！ もともとそういうゲームなんだ

！ 仕方ないだろ！！

俺は悪くはない、コレは正当防衛だ、見つければ殺される。

いけ、いけ、いけ、いけっ！ いけッ！！

バネ仕掛けのように立ち上がり、

草むらをかき分け、男と視線があった。

空洞のような目が、こちらを見ている。

気にするな、いけ！いけ！いけ！いけ！いけ！いけ！

いけえつつ！！　いけえええアアアつつ！！！

振り上げた、杭を、俺は深々と突き刺した。

『アアアアアアアアアアウツツツ！！！！』

俺の叫び声と、男の叫び声。

発せられた原因こそ異なるが、それらは木霊し、響き合い、森の全てを震い上がらせ、そして消えていった。

男の胸元からは、生えるように杭が突き出し、吹き出ようとする血は、その猛熱へとあてられ蒸発し、黒い塊となつてこびりついていった。

『あ、アアア……』

男はゆっくりと、先ほどよりもゆっくりと、俺に近づいてくる。

こちらへ手を伸ばし、指を広げ、つかみかかるように。

恐れに震え続ける俺の心拍が、ますます熱を叩き上げ、グツグツと、肌が煮立つ程の熱が男の身体を焼いている。

胸に突き刺さった杭は、その呼吸すらも熱によって支配し、時折喉から火の粉を散らし、器官を焼きながら、男は加熱されていく。

『うあ、ああ、あああああああアア』

男の姿に、俺は、全身の、恐怖が、油をそそがれたように、燃え上がり、

『ああ、あああああああああッ！』

杭を、引き抜こうと、何でも良い、この現状を終わらせようと、

『ガアああ！あああ！アッアアアアアッアッ！！』

思い切り、柄を、引っ張り、デロリと溶解落ちた肌が、溶けだして

いくのも気にせず。

『ダア、あああああッッ!!』

杭を、黒い塊で男の身体へ溶接されたレヴァンティンを、引き抜いた。

『だアアアア、アああアアッッッッ!!?』

杭は勢いよく抜け、支えを失ったように男はグラリと地面に膝を落とす。

がっぼりとくり貫かれた胸部は、その多くが溶けだし、一部は杭に焼け付つきそのまま持ち去られた。

真っ赤な灼熱の息を吐いて、男は再びゆっくりと立ち上がる。

恐怖から構えた杭は男のカラダで厚みを増し、柄をつたい、溶けだした肉が、血が、俺の指先に触れた。

再びの、叫び、いや咆哮。

杭を放り出し、俺は、走った。

逃げるしかない。

男は、身体を大きく失いながらも、這いずるように、のっし、のっしと、追いかけてくる。

歩く度に臓腑が溶けだし、地面に落ちた灼熱の血液が植物を焼き、大地を汚す。

それでも、ゆっくりと、俺を追いかけてくる。

何で、何で生きてンだよ!!

刺してしまった、人を。

必要以上に、残酷に、必要以上に、痛々しく。
その男は何故か歩みを止めることもなく、ゆっくりと俺を追っている。

血は……あんな色をしていた。

他人の叫び声を、産まれて初めて聞いた。

臓器は、あんな形だった。

人は、こんなにも脆かった。

この全て、俺は知っていた、分かっていた……？
そんなわけ、そんなわけあるわけがない。

木の陰に隠れ、崩れるように座り込む。

呼吸が、喉が、カラカラに乾き、

その更に奥からは酸っぱいモノが上がってくる。

それは、遅すぎるほどに、今更になって。

『だばアツ、るう……』

俺は、俺はそう、何も知らなかった。

何も、知らなかったのだ。

俺の知っていた世界なんて、

確立していたはずのスタンスなんて、

所詮はこの程度のモノだった。

理解していたはずの多くは単なる知ったかぶりで、

その実、俺の中にリアルなんてモノはナニも根付いてはいない。

無知という衝撃に打ちのめされて、

そうして俺は、崩れ落ちていくのだった。

岸留美子 a

私がコノ告知をみたのはネットカフェの一室だった。

当然ジョークだとは思ったけど、警察の対応や、掲示板の様子とかを見てたら、何か信じる気になっていた。

信じてからの決断は早く、周囲のいろんなモノが後押ししてくれているように感じた。

今、私はネットカフェ暮らしをしている、別に難民とか、そういうわけではないケドね。

全ての発端は、政治家である父。

とは言っても、別段珍しいエピソードや、悲しい出来事があったわけでもなく、

タダ単に、お堅く私の人生を型にはめようとする父親と、自分の主張を撤回せず、自由に生きたがる私が、衝突し、分裂し、今に至っている。

そういうわけ。

そう考えると、やっぱり難民かも知れない。

それからは学校にも通わず、家にも戻らず。

昼間のバイトでのお金と、悪いヤツとの付き合いでのお金で、生活を続けている。

それこそ、本来の目的を失い、父への反抗のための一人暮らしだ。どう考えたって、ナンにも、意味がない。

『ホラ、それ置いて……そう、早く失せな』

気弱そうな学生をカモにして、今日も生活費稼ぎ。

その日の稼ぎは、あまりにも少なく、腹が立ち、腹が減り、夜のネオンに誘われて外食の1つでもしたくなる。

当然、そんなお金なんて無いケドね。

仲間と別れた私は足取り重くネットカフェへと戻っていく、途中コンビニに寄り、おにぎりを、2、3個、全部たらこマヨネーズ、それを買っていった。

あー、憂鬱だなあ……。

私は時計を取りだし日付を確認する、朝から何度目の行動だろうか、もちろん何度見ても日付は変わらない、そう、今日は。父の誕生日。

どさあ、つといつもの椅子に腰掛け、初めは漫画なり何なりを読みふけていた。

だけどそれも、長くは持たない。

PCで、ネットなり何なりを試してみるけど、やっぱり持たない。

一人遊びとかも、持たない。

私は……別に父のことが嫌いではない、むしろどっちかというと好きだった。

それは勿論、母親よりとか、そういう感じの度合いだけど、それでも、どっちかというところ好きだった。

だけど、親はまったく見てくれない、私のことを。

自業自得だとも思ったけどね、私はどちらかというと自分が好きな子で、周囲との何たら何てあまり気にしない、そういう人間だから。父のような、厳格で模範的な人間からはほど遠く、それを父も気にしていたのだと思う。

父が、私に構ってくれるのは、結局の所私を叱るときが多くなり、それでも自分の態度を変えない私は、父に構ってもらえるタイミンを、ドンドン偏らせていくことになる。

結果的、私の中の父は、怒っているイメージが強い。

優秀な政治家としてのイメージをかき消すほどに、それは増していき。

ある日の口論を境にそれが爆発した……。

父との縁はそれから半年以上途切れたまんま、連絡も取っていない。父も……私に似て、じゃない、私が父に似て頑固だから、父もまた、頑固だった。

『だあ……もう、畜生、オヤジめ……』

あー憂鬱だ。

こんな私だけど、記念日とかは大切にする方だ。

何かしておきたいんだけど、何を今更、と、そう言う気持ち強い。何かしたは良いが相手にされない、ソレはそれで私は哀しむのではない、そう思ってしまう。

さあーて、どーすればいいんだろうかね……。

ふと、思う。

父親相手にこんなに考えるのって、ファザコンなんだろうか。

自分を産んで……って、産んではないか、作って？育ててくれて、そういう人間に対してあれこれ思うのって、ファザコンなんだろうか。

周囲は、色々言うよね。

この年で喋ってたらファザコンだとか、

逆に、中学生まで一緒に風呂入ってて、それでもファザコンじゃないってのもいた。

んまあ、別に、ファザコン定義とかはどうでも良いと思うけど、父に対してあれこれ考えるのが悪いコトだって、そういう風には思いたくはなかった。

とりあえず、私はメールエディタを開き、父に対し……こう、なんか書こう、そう思った。

『お久しぶりです……いや、何か違うかな……』

『連絡しなくて御免なさい……ん、謝ってどうする』

『別に気にしていたわけではないのですが………って、勘違いさせそうだな』

んう、煮詰まる。

こう長い間話していないと、どう切り出して良いのかすら分からない。

しばらく悩んだ後、苦し紛れに私は。

”お誕生日おめでとう　　留美子”

ただ、それだけを、記入し送信した……。

淡くも、何らかの反応があることを期待して。

それから数日間、

父からの連絡等は一切無く、返事の来ないメールを待つのも何だか切なく、寂しい気持ち。

相手は50代のオヤジだケドね、何だか余計に虚しくなる。

当の私は、いつもよりも荒れていた。

『おッ、おい！もうヤメロよ！死んじまうぞ！』

仲間の制止も振り切り、私は学ランのメガネに蹴りを入れる。

何でかな、どんどん父の求めていた私から遠退いていく気がする……。

『バツか、ヤメロって！殺す気かよオイ！』

仲間は血相を変えて私を羽交い締めにした。

何だろう、もしかしたら父はこの現場を見てるんじゃないか……
そんな気にすらなってしまう。

『お前バカだろ？バカ、バカ、死んだらどーすんだよ？分かってる？』

仲間は、私をひっぱたく、顔とか、何か、力一杯に。
痛いじゃない、フザ戲んなよ。

私は……いったい何がしたいんだろう。

涙を浮かべて、どこかに問う。

好きでもない父のことで腹を立て、自分を見失い、いろんなモノをなくしてしまった。

父の言うとおり、過ごしていれば、それこそ私は政治家の娘、いろんな将来が待っていただろう。

この父への反抗は、結局、何を産むのだろうか。

人生転げ落ちて、ソレでお終い？

もしかしたら、私はただの単なるファザコンで、父に構って欲しいばかりに、心配して欲しいばかりに家を飛び出し、こんな暮らしをしているのかも知れない。

私は、ただの、自分の気持ちの整理もできない餓鬼なだけかも知れない。

親離れすらできていない、そういった類の……。

ただバカな、何処かがおかしい。

そうだった。

ほんとに、もう……。

どうしようもない。

ああっ、もう。

ファザコンが止まらない。

……よし。

電話しよう。

やっぱり、直接話さないと、私は自壊する一方だと思う。

こんなに、緊張する電話って何時ぶりだろうか？

きっと……きっと私が自意識になってるだけなんだと思う、いやそうに違いないのに……。

ちやりと10円を入れ、受話器を取る。

予備の10円を出そうかと思ったが、それは止めておいた。

ウチの、家の電話番号は……。

ああ、ダイヤルする手が、何でこんなにも震えてしまうのだろうか。

とうるるるるる、とうるるるるる、とうるるるるる

とう、とうるるるるる、とうるるる……。

『はい……どちら様ですか？』

『……私です』

『……………』

『岸曾太郎“さん”はいらっしゃいますか？』

『……………私です』

『ウ、ソ、です。ゴメン……………分かってる』

『……………』

『読んだ……………?』

『あ、ああ……………』

『……………そう』

『なんでだ……………』

『……………?』

『何で、今さらになって?』

『分かんない?』

『いや……………いや、すまない』

『そう……………』

父が謝るのを初めて聞いた。

『心配……………してた』

『ウソ』

何でこんなコトを言うの？

『いや、しんぱ……』

『ウソだって、お父さんが女心とか、娘の気持ちとか、そーゆーの疎いのは分かるけどさ、そんなの、だって、ウソだよ……』

こんなコト言うために、電話したんじゃないのに。

『私だけじゃない、母さんも、叔父さんも、みんな心配してる、だから、ああ、迎えに行く、場所は何処だ？ 何処にいるんだ？』

『ウソだよ……』

『ウソじゃない、心配している、だから戻ってこ………』

っー、っー、って、そこで、電話は途切れた。

ネットカフェに戻った私は、いつものようにメールをチェックする。もう、何も来ないことは分かりながらも、目をつぶって、それからゆっくりと空けて、微かな希望を抱いたことに後悔する、その繰り返し。

だけど、今日はいつもと違った、その中に……。

そう、あのメールがあったのだ。

“お父さんへ、
ニュースとかで話題になってるあのゲーム知っていますか？
私、それに参加します。

止めて欲しいとか、そういう風にも思いますけど、もう手遅れです。
お父さんが、私の所に来る頃には、私はもうゲームの中から。

だから、お父さんは、心配して下さい、
もっともっと、私のこと心配して下さい、
食事が喉を通らなかったり、夜眠れなかったり、そんな感じに心配して下さい。

私は、お父さんのこと嫌いではないんです。

ただ、お父さんも私も頑固だった、とか、
何か、いろいろありますけど。

すいません、実はあんまり気持ちの整理はついていないんです。正直の所、お父さんと、色々と、もめたり、喧嘩したり、そうしたいで、

私の人生、だいぶおかしくなってしまったと思います。

まあ、お父さんの子なので、コレがもともとの運命かも知れないんですけどね。

だけど、だから、もう帰れません。

御免なさい。

もっと、素直であれば良かったと、今更ながらに思います。

我が忸な娘で、本当に御免なさい。 留美子”

私はゲームへ参加する直前、父へとメールを書いた。

送信とほぼ同時に、私はログインをクリック。

返事が来ないか、待ちたかったけど、そうしていると色々と決心が鈍りそうだったから。

そうして、私の存在は世界から消えた。

そう、お父さんの手の届かないところに。

私は、乾ききった荒野の地に降り立った。

拳を合わせ、呼吸を落ち着ける。

体も軽い、どんなモノでも殴り倒せそうな、そんな攻撃的な私。大丈夫だ、負けるわけがない。

父がどう言った顔をするか、考えるだけでも楽しみだよッ！！

私は、やっぱり何処かおかしい。

だけど、今は何かが吹っ切れている!!

『だあらああッ!!どっっーからでもかかってこーーーい
』

拳を、握りしめ、叫び声を解き放つ。

そして、そこで私の意識はプツツリと途切れた。

不思議に思ったりとか、怖いとか思ったりとか、そういうコトは一切ない。

何でかっていうと。

その時、私はもう、死んでいたのだから。

目黒優平 a

僕は、成績優秀だ。

運動も比較的できる、友達もいる、顔も、メガネだが、まあ悪くはない。

親や先生、周囲の大人からの印象、ウケもとても良い。

決して騒がず、人に迷惑もかけず、空気を読める。

そして、殺人に対して、強く惹かれている。

初めは漫画とかそういうモノだった。

現代に溢れるメディアの力は、子供にすらイトもたやすく死を提供した。

僕は、漫画とかは許されていなかったから、友達から借りてたりしたのだけだね。

そのうち、妙な、興奮に近いモノが体を走る、ゾクリと背筋を撫でるようなソレはモチロン、友人にはナイショだった。

自分でもおかしいと思うほどに、僕は無意識的にその感覚を求め、時を経るごとに、感心は徐々に高まり、その触手を広げていく。

PCを使えば、今の時代、どんなモノだって簡単に手に入った。

モニターの中では、叫び声を上げる女性の頭部が、散弾銃で、削れるように、吹き飛ぶ。

少し探せばこんなモノがいくらでも転がっている。

モニターを反射する眼鏡に次々と写し出され、殺し、バラバラにし、悲鳴がイヤホンの中に木霊した。

親がネットの影響とか、そういうモノを気にするのも分からなくもない、

だって、そう思う僕が、最も影響を受けていたのだから。

吐き出される渴望はますますエスカレートし、パサパサした現実を、血の湿り気で潤すような日々が続いた。

他人とのかかわりを拒むようになり、家族とのかかわりを拒むようになり、何処か暗雲が立ちこめたまま僕は大人になっていく。

そして僕は、父も、母も、妹も、周囲の大人も、先生も、誰一人として気づかないまま、

暗闇の奥へ奥へと世界を掘り進み、帰れなくなっていった。

誰も、そう誰だって、気付くはずはないんだ、父も母も僕が行うことには大抵興味を持たず、何をやっていたかなんて理解できるはずもない。

表では、僕は完璧な優等生、何かを疑われると言うことがそもそも無い。

その間、僕はフォルダ内に、大量の刺激的なコンテンツを収集していく、そうやって充足を求めていく……。

そう、僕は優等生だ。

それは優秀な大学を出た父と、優秀な大学を出た母から生まれたのだ。

当然だ。

そんな父の押しつけること、母の押しつけること、その全てを完璧に履行してきたのだ。

当然だ。

我を押さえ、どれだけこのパサパサした世界が醜かろうと、僕は不満を言わないのだ。

当然だ。

そんな僕には、こんな世界に散らばる、人道、倫理、そういったモノすら、煩わしく見えるようになってくる。

その父は、ニュースを見ながら僕によく言った。

人を殺したら、人生が台無しだ、と。

それを聞いたんに、僕は、笑いをこらえるのに必死だったんだ。
殺してはイケナイ、そんなことはダレだって知っている、大切な
は良いか、悪いかではないのだ。

いつの日か、僕は人を殺す。

高校へ進学し、大人になるに連れて、その欲求は強く、押さえきれ
ないモノになっていった。

そうして、僕のもとにもあのメールがとどいた。

興奮が、吹き上げるようにしてわき起こる。

実に、実に素晴らしいこの誘い。

乗らない手は無い、やらない手はない、初めはそう思った。

だけどこの興奮の中、思ったよりも冷静な僕がいた。

ここで、人生をなげうって参加しても良いか、思案のし所なのだ。

確かに、誰に邪魔されることもなく、己の嗜虐心を解き放てる、そ
う思う。

だがしかし、“ たった ” 20 人だ、僕以外が殺し合い数が減ること
も十二分にあり得る、更には、自分の命の危険もある。

どうしよう、どうするか。

殺したい、自分の手で、衝動が内側から僕を突き上げ、
思いの外優柔不断になりがちな自分に歯ぎしりをしながらも、準備
だけは整えその時を待っていた。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ、かつ。

ベッドの中、天井を見上げ思案を続ける。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ、かつ。

秒針が、休むことなく、時を刻み。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ、かつ。

暗い部屋、それが僕の心を、イツソウ、落ち着かせていく。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ、かつ。

正直、もう我慢ができない。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ、かつ。

落ち着きを失った瞬間に、僕は爆発してしまいそうだった。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ、かつ。

辺りを包む暗闇は、己をより高尚な存在へと持ち上げてくれる気がする。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ、かつ。

取り囲む、全てが、僕を誘う、激しく、騒がしく、つんざくように。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ、かつ。

そしてそれは、同時に、狂気を、滲ませていくような……………。

かつ、かつ、かつ、かつ、かつ……………か、かきき……………き、か……………きゅく。

理性の切れる音がした。

機械仕掛けのように、布団を吹き飛ばし僕は起きあがる。

マブタが千切れるほどに目を見開き、冷静なその頭で、理性を失ったその頭で、初めの標的を探す。

音は立てないさ、僕は猛獣ではない。

闇夜に溶けるように蠢き、忍び寄る。

獲物が気付いた時には全ては遅い、そういった獣だ。

狩人でもない、狩人は、一撃で仕留める、

僕は、一撃では仕留めない、そういう獣だ。

残念ながら、僕には牙はない、だけど、人は道具を持っている。かみ砕くだけではない、裂き走るだけではない、そんな獣だ。

21人、違う、そうじゃない、ウチにはまだ3人イル……。
全ては、ソレからだ。
僕は机を引っかき回しカッターナイフに手を掛けた、きちちちちちちち。

《『目黒』がログインしました》

設定、それは大切だと思う。

どういうコトかと言えば、つまり、どういうシチュエーションでコトを楽しむか、そう言うこと。

はやる気持ちを抑えつつ、僕は入念に設定をしていった。

モチロン、負けないことも大切だ。

負ければそれだけ、楽しみは減ってしまう。

今はどれだけこの時間を楽しめるか、ソレを最優先にするべきだ。

そうだよ、コレはゲームなんだ、精一杯楽しまないと。

僕が降り立ったのは、荒野だった。

何も無く、凸凹とした起伏のある地形だけが広がった荒れ野。

そして、獲物を希求する僕の気持ちも最高潮へと高まっていく。

だがまあ、思ったように出会いは訪れない。

意識を集中し、ソレこそ獣のように、人の気配を探っていく……。

餌を探すような、根本的な欲求がその感覚をより鋭敏なモノへと変

えていく。

踏みしめる大地は僕の力を最大限に引き出してくれるだろう。
高まる高揚に負けないように、できる限り、研ぎ澄まし、己の犠牲
となるモノを求め続けた。

そして、初めの標的を、見つけた。

ソレはたった今、この世界に現れたようで、愚かなことにも光りを
放ち、地面へ降り立った。

その光は女へと姿を変え、短めの金髪、強気な視線のソレは、全く
もって愚かなことに叫び声を上げ、見えていないはずの何者かへ威
嚇をしている。

僕のジョブは土と石のジョブ。

目に見えぬ力、魔法のジョブ。

その力を、今からあの女へとぶつけるのだ。

ああ、楽しみだ、凄く楽しみだ。

杖を、そして腕を添え、ヤツへと向ける。

先端がツルハシ状に分かれた不格好なカドゥケウス、

その二股は2匹の蛇をあしらっており。

深い緑と紫の光りが、漂い、収束し、あらぬ力の奔流となって、吹
き出んとする。

自分すらも食い尽くすような甘美な力が、杖を通して流れ込んでき
た。

指が、杖に添えた腕が、己の意志に反して、

ビクビクとうねり、

ガクガクと痙攣し、

ワシャワシャとかき乱す。

『iiiiiiiiッよ！ この感じ、この感じだ！！』

ああ、今だ、今こそ解き放つときッ！

『いいぞ、いいぞ、いいぞいいぞいいぞーッッ！！』

全てが飽和した瞬間に、ソレは煙となって解き放たれる。

広がるのではない流れる煙、ソレはまるで土石流のようにイトもたやすく女を飲み込んだ。

光りが散り、静けさが戻った荒野、存在する生物は僕だけだ。

『弱いな、弱い、弱い、弱い、そして、また情けない、本当に……』

煙が舐めたモノは全て石へと変わり、枯れ果てた草木、大地、小動物、そしてあの女も同様。

目を見開き、叫びを上げたままの表情で、女は塑像へと成り下がっていた。

ああっ、本物だよこの力、対象の全てを奪うようなこの力。

凄い、凄すぎるよ、こんなの、こんな力、凄すぎる！

そして僕は酔いしれる、己の中の凄まじいオーラに。

そうして僕は誘惑された、己の中の圧倒的な力に！

『くふ、ふひあははあっ……』

笑いがあふれ出し、面白過ぎてどうしようもない。

『なんだよ、ソレで終わりか？ もう終わり？ 抵抗の1つでもしてみたらドウだよ？』

返事はない、そんなことは知っているのだが。

僕はその全てを支配したかのような優越感を、ゆっくりとなめ回すように堪能していった。

『はああ、弱い、弱い、弱い、弱い』

僕は、女の周りをぐるぐるぐるぐると回る。

威嚇していたハズの敵は目の前にいるのに、女は一点を見つめて立ちすくんでいた。

さあて、と、僕はツルハシを構え直し、ドウしようかと女の身体を指さし、這わせてみる。立てたツメが肌を削り取り、土となつてこびりついた。

指の中で転がした土は、軽く空を舞い、還っていく。
さて、さてさてさてさてさてさてさて……。

『ッだァ！』

ツルハシを振り下ろし、腕を肩からもぎ落とした。

像は痛がることもなく、ただ、声も出さずに叫び続け、
衝撃で、薄ペラな衣服が粉々に砕け散り、石の肌をさらす。

『ぽァ、壊れたなあ、あー、あー、あーはは』

繰り返し、繰り返し、地に落ちた腕に繰り返し、ツルハシを振り下ろしていく、

腕は、二回、三回と碎かれ、徐々に、徐々に、砂へと還つていった。
たあ、楽しいいつ、こんなに、こんなにもだッ、だッ。

『次はー、んぶァ！』

そうやって、ゆっくり、ゆっくりと、僕は像を崩していった。

もう戻せないように、もう人じゃないように、

二度と、立てないように、二度と動くことがないように、
バラバラに、土に還していく。

『弱いなッ、弱いなァッ！ そら、ほらあ、だァッ！ もっと、

もっと、もっとだ、ほらあ、もっとだあ！ ツルハシッ！ ツルハ

シだよッ！ ほらッ！ ツルハシだッ！ ほらっ、ホラッ ほらっ、

ほらああああッ！！』

そのままの勢いでツルハシを横に振り、像を腰の部分からへし折つた。

上半身は大きく破片を散らし、地面へと叩きつけられ、突き刺さる。
見る影もなくなり、身体の大半を失い、胸部と頭だけになった像に
足をのせ、ぐりぐり、ぐりぐりと顔を地面に押しつける。

あはは、惨めだなあ、そう、本当に惨めだ。

そろそろ可哀想だから、とどめを刺してあげようか、なんて。

身体を裏返し、顔を天へと向けさせた。

こんなになってまで、ナニを睨んでいるのだろうか。

視点を失った瞳は、タダ虚しく空を見ているだけだった。

そして僕はソレの胴体に足をかけ、ツルハシの狙いを頭部に合わせた。

今、今まさに迫り来る瞬間。

いいよ、凄く良い、下品な表現ではあるがイってしまいうさだ。

そう僕は今、まさに絶頂としか言いようのない限界点にいる。

こんなのは現実では味わえるわけがない、味わいようがないんだ
!!!!

『あは、は、はああああああああああああああああああ
ッ!!!!!!!!!!』

そして、僕は、ひと思いに、その頭をたたき落とす……。

天を仰ぎ、充足から顔が崩れた。

あんん、これだ、この感じだ。

まずは一人、そして、これからだ、これからが本当の楽しみだ。

全てを殺し僕のため、僕だけのための世界を作る。

僕なら可能だ、もはや簡単な域に達している。

荒野に吹く風が砂を巻き上げ、ソレに吞まれ女の残骸も消えて無く
なっていく。

全てが無くなる前に、僕は、その一欠片を拾い、懐へ忍ばせた。

何人かな、さあ、後何人殺せるか。

本当にもう、

なんて、

ああ、なんて、最高な世界なんだ……。

上田栄生 a

私は、俗に言うエリートサラリーマン。

もつと俗に言えば勝ち組。

一流企業に勤め、その中でも十分なキャリア持ち。

望むモノは大抵何でも手に入るし、生活はマサしく順風満帆、仕事もいたって順調である。

コレと言った派手さはないモノの、今の生活には十分満足していたし、

何かこう、突出した辛さのようなモノも感じたりはしなかった。

新商品のPRを済ませ仕事を片付けた私は、疲れた足を引きずってと自宅へ帰った。

私の自宅は高級マンションの一室だ、東京湾を見渡すパノラマが自分で言うのも何だが、なんとも魅力的。

夜はネオンに包まれる東京の町並みが、部屋の中まで照らしてるかのようにだった。

『ただいまあ……………あー』

まあ、とは言っても、広い4LDKには誰も待っていてはくれない、コレでは魅力も半減だ。

結婚できない男、とかそう言うわけじゃない。

自慢ではないが顔も悪くない私は会社でも結構モテる方だ。

一応細かなおしゃれにも気を使うし、自分で言うのも何だが、女性への態度も紳士的な方だと思う。

バレンタインデーにもらうチョコも結構なモノだ。

それは同僚に学生かよ、と茶化されるほどに。

正直に言えば数ヶ月前までは、ここで妻が私の帰りを待っていてくれたものだった。

夜遅い残業でも、何時も待っていてくれたのになあ、残念ながらその姿はその痕跡すら無い。

なにも、別に特別なことはない、

妻は仕事中心で家庭を顧みない私にとうとう愛想が尽きて、実家へ返ってしまった。

ただソレだけのこと。

アイツも苦しさ、辛さを噛み殺しての選択だったようだが、どうしても今の生活には耐えきれなかったよう、

今にして思えば、何というか、自分が愚かだったというか、うん、ありきたりだがそう言った思いに駆られる。

何かこう、少し虚しくなってしまう。

この部屋は私一人じゃ広すぎるんだ。

余りあるスペースを活用すべく私はどさりとカーペットの上に座り込み、

近くのコンビニで買ってきたビールとつまみを広げ、一人晩酌を始める。

高級なワインとかも嫌いではないし、手もとどくモノなんだけど、何というか安っぽい缶ビールが私は好きだった。

金はあるけど金銭感覚が貧しいのだ。

一所懸命に稼いだ金も結果的にはナニに使ったらいのか解らない、何のための労働なのか、それは一時期は妻のためだと思っていたが、それでも、今となっては手段が目的に変わっていたような気もしくもなかった。

それこそ、何というか、私はこんな生活しなくても良いんじゃないかとか、

なんだろう、ソレこそ田舎に帰って農業でもしながら、自給してても良いんじゃないかとか、思ってしまう。

頑張って、踏ん張って、一応なエリートになったけど、よくよく考えるとそんな称号、平凡な私には扱いきれぬ大層なモノで、正直名前負けというか、何かそんな感じがした。

んーはは、寂しいなあ、誰か友人でも呼ぼうか。
んん、寂しい。

テレビの向こうではそろそろ消えるのではないかという下火のお笑い芸人が、既に視聴者も飽き始めた持ちネタをひたすら繰り返している。

一時期はお茶の間をにぎわせていたのにな、正直、世間てのはこうやって、

人を使い回してクルクルクルと回ってるんだろーな、とか。

何か重い感想が自然と出てきてしまうのだった。

まあ、私だって、何時かは消えちゃうんだろうなー、とかとか。

『んなあー、駄目だ、駄目だ、暗いぞ私よー！明日だってー、会議やら何やらいっぱいあるじゃないかあーっ、テ、ン、シヨ、ンーをー、あっげろーっ』

自慢じゃないがお酒はあんまり強くはない、飲むのは好きだが、気持ちよくなった先はワリとボロが出やすいので上司からも良く注意されていた。

日ごろの疲れも助け、あっという間にデキ上がってしまったようで、妙なカンフーポーズを決めつつ、部屋をうろうろと巡回、

陸上選手のように室内を駆け回り、バトンをパスしたところで両手の翼を広げ空を飛んだ。

渾身のストリートで頭の中のタイソンを吹き飛ばした後、そのままカーペットへ飛び込み遠泳を開始する。

最終的にはスピードスケートの選手のような華麗なターンを決めた瞬間、

テーブルのカドにツマズいて、私は思いつきダイビングした。
持っていたビールを派手にぶちまけ、そして、ショーは終幕する。

あー、冷たい。
つめたいなあー。
なんだか、まあ、でも少し気持ちいい。

私とそのメールを発見したのはその数時間後だった。

晩酌も終盤にさしかかった頃だろう。
寝る前にメールの確認でもしておこう、と、
翌日の出勤準備を整えてフト思い当たった。
何気なくP Cを開いたその目に、そいつは、飛び込んできたのだった。

そりゃ初めは多いに笑った、馬鹿な話もあるもんだと、
散々笑い転げた後、ふーっと一息つき、ふと思うと何かプツーンと、
切れたというか、悟ったというか、
ああ、こう言うことなのか、と理解した気がした。
たぶんアレだよ、今度は私が消える番なんだ、
テレビから消えるお笑いタレントのように、私にその番が来たんだ。
アルコールに蹂躪された脳がはじき出した答えは全くもって素晴らしい。

そーっと決まれば話は早い、
仕事の速さがウリの私だった。
千鳥足で準備を進める私に迷いなどは一欠片もなく、それこそまさにノリだけだったんだと思う。

『いよーっし、未知の世界へとーび込むぞーっ』
酒の勢いとは、何とも恐ろしいモノだ。

ん、ああ……そうか、昨日はそのまま寝てしまったようだ。

疲れていたからな、お酒も入ってそのままバタンだ。

確かビール、そう、ビールをこぼしてしまったんだ。

早くふかないとシミになってしまう。

アイツが気に入ってたカーペットだ、汚してしまっただけは今度合ったときに起こられるかも知れないな。

どうやらスーツのまま寝てしまったようで、妙に整った窮屈さを感じた。

不思議なことにネクタイもピッチリ、どういうコトかビールの跡すら見あたらなかった。

きつと頭がぼんやりしているせいだ、早く顔を洗わないと。

いや、そうだ、まずはタオルだ、タオルを探さないとシミができてしまう。

ちがう、その前に、カーペットは何処だ？

ソレは確かに足下に敷いてあったはずだ。洗いたてでフカフカのそれ、だが、不思議なことに手を伸ばしてもそこにはあのフカフカした感触はない。

ソレはどちらかというところとチクチクと言うか、何というか、そういうったモノ。

何度触っても、何度触っても、その感触は変わらない、いよいよ解らない事態に、混乱は拍車を掛けて絡みついてくる。

恐る恐るのチクチクとご対面、おっかなびつくりと目を開くと、そこに広がるのは青々茂る草花。

私が寝ていたはずのその場所。

信じられないモノが広がり、信じられない驚きが生まれた。

調子に乗って家を飛び出してもしたのだろうか？

割れんばかりにずきずきする頭が思考を惑わせる、やっぱり、飲み過ぎている。

まずは、ここが何処だか確かめないと、そう思い、私はゆっくりと立ち上がる。

その目に飛び込んでくるのは、見慣れた我が家でもなければ、その近所ですらない。

そこに広がっていたのはウツソウとした木々、小動物、森。

『な……ん……そつつ？』

ちよと、ちよつと待て、落ち着け、落ち着くんだ。

落ち着こうとすればするほど落ち着かないので、

落ち着くのを止めてみるがやっぱり落ち着かない。

色々な可能性に思考を巡らせるが、どうにも事實はハッキリとしない。

頭痛が思考を惑わせ、肝心な部分がボヤけてしまっている。

落ち着くんだ、記憶をたぐり寄せろ、そうすればきっと答えが見えてくるはず。

頭を叩き、振るい、必死になって脳の中を巻き戻してみる。

晩酌、ビール、断片断片ではあるが記憶はしっかりと残っている。

お笑い芸人、メール、そして、ゲーム。

ゲーム……？

そうか、ゲームか？

と言うことは、今はゲーム中、ココが、そのゲームの中なのか？

ゲーム中だから見知らぬトコロにいる。

コレで全て辻褄があう。

合ってしまうか？

『な、バ……ッ』

頭の中が、真っ白に染まる。

ナンという失態か、有り得ないミスか。

あろう事に、知らずのうちに、私は殺人ゲームへと参加していたのだ。

完全に酒に飲まれ、トンデモないことをしでかしてしまった。
今まで積み上げてきたモノを一瞬で壊してしまったのだ。

その苦しみは計り知れず、私は、地面へとしゃがみ込み草を耒る。
何かをしておかないと、今すぐにでも気がおかしくなりそうだった。
そうか、殺人ゲームか、そうか。

考えてみても、一切の現実味は沸いてこない。

だけど、広がる風景がそうやって勝手に辻褄を合わせてしまった。
それはもう、笑えナイと言う領域を軽々と通り越している。

こんな有り得ない、有り得ない、有り得ない、本当に、こんなに、
馬鹿げた失態は初めてのコトだ。

それは、馬鹿げていた、あまりにも、可笑しすぎるほどに、
そして、可笑しさは、次第にその形を変えてゆき、
気付くと、信じられないコトに、私は、笑い転げていた。

だって、だってだ。

ナンデかってこんな、こんな痛快な失態は初めてなのだ！
今まで失敗をしないようにと、日々注意してきたのが綺麗さっぱり
吹き飛んだ！

バカバカしい！酒の勢いで殺し合いですか！？愉快すぎる！
胃がよじれるを越えてねじ切れそうだ！

地面を叩いて、腹を抱えて、転がって、
天を仰いで、大地を抱いて、

私は全力で大笑いした。

ああ、結果はどうでアレ、最高の冗談だ！

長年積み上げてきた人生という名の巨塔、ソレを一蹴したのだ。
超爆笑だ！

私の塔は高いぞ！きつと凄まじい音を立てて壊れるに違いない！
毎日取引先に頭を下げていた私が、今度は人を殺すのか！？
バツかっている！

どうせならあのふざけた上司に一矢報いたかったところだ！

はっはぁー何か知らないが気持ちいい、
開放的だ！

変な人かと思われそうだが、今の私はそんなことは気にしない。
そうだ、笑え、笑え 笑え、笑え笑え笑え笑え！！

焦りも、恐怖も、そんなモノ一瞬で、跡形もなく消えてしまった。

兎に角だ、私は今、この瞬間、
最高に、楽しんでいる。

生きながらに死んでいるかのような普段の私は、今まさに華麗なる
不死鳥のように蘇ったのだッ！

よじれた胃がだんだんと元に戻ってきて、
抱腹絶倒の嵐もようやく晴れ渡ってきた。

自分が消える番、正しくそうだったのかも知れない、
思いの外清々しい今、この時。

いや、ここ数年で最も清々しいこの瞬間。

落ち着いて考えてみるが、やっぱり逃げ場はないのは確かだ。

正直、私に人が殺せるとは思えない、

そう言った過激な仕事は、取引先とはやらないのだから仕方がない。
かといってどうすることもできない、仕方ないから殺されるのを待
つのか？

面白くもない、有り得ない選択肢だとは思うが、だけど、まあ、こ
のまま死ぬのならソレもそれで、仕方がない、そういった気もした。
笑った後の爽快感、身体の中がスッキリと、まるで透き通ったよう。
これ程までに清々しく、何もとらわれないような開放感のままなら
そう言うのもアリだと思う。

……その事が、油断、気のゆるみを作ったのかも知れない。
私の後方から、強い衝撃が襲う。

視線が、ぐらりと揺らぎ、

天地がどうとひっくり返る。

体当たりするようにぶつかってきたソレは、

私を押し倒し、馬乗り状態になって私の前に現れた。

ソレはまだ若い、いや、幼い？

子供のように思える。

そして、手に持っているソレは、ナイフのようだった。

見開かれた私の目に、その怪しげに光る刀身がキラリ、ギラリとう
つり込んでいる…。

子供の目は見開かれ、その形相に、私も心の中で後ずさりしたい心
境だ。

そして、私の顔に、ピチャリと何かがこぼれる。

鉄臭いソレは、きっと血なんだと思う、

ああ、なんだ、もうゲームオーバーなのか……。。

折角なら、最後に、もう少しだけ笑っていたかった。

上田栄生b

『たあ、たッ、助けて下さい!!』

飛び乗った少女の第一声はソレだった。

目を見開き、ナイフを握りしめた少女は、声を震わせながら私にそう言った。

ぽたりぽたりと滴る血、どうやらソレは彼女のモノだ。

肩には、決して深くはないモノの、小さな傷を背負っているのが見て取れる、

おそらく、彼女は、襲ってくる何かから逃げていた。

そして、その何かは、予想するに難しいことではない。

とりあえずは、彼女をなだめるんだ。

動けないままじゃドウにもならない、ドウともならない、

落ち着いて、そう言いながらも一番取り乱していたのは自分だった。

彼女は震える足をパシリと叩き、ゆっくりと立ち上がった。

私は、足がすくんで立てなかった。

少女は、踊り子、だろうか？

水着のような最小限の衣装は、年齢に似合わず扇情的なモノだった。細身な身体にしても、その武器にしても、少なくとも戦いに向いているようには思えない。

何て言うか、カモだろうか？そう、カモだ。カモ。

そのカモのよう。

襲っているその何か、それは当然のこと参加者だ。

そして、この子も参加者だ。

立場的に考えてしまえば、どちらも敵と言うことになる。

ルールの言えばココでこの子を殺すのが、このゲームなワケか……。

まあ、勿論そんな気持ちは欠片もないのだが、

それでも、自分の置かれている奇妙な状態、その異常さに、足場のおぼつかない不安を感じる。

自分の仲間だと思っていたものも、全て敵かも知れない、そう言う不安。

この子が飛びついたのが私で良かった、本当にそう思う。

それでだ、ソレでどうしよう。

背中のキズは大したことはない、本人すら気付いていなかったように、滴る血を見て小さな悲鳴を上げる、

私は取り急ぎ、彼女の手を引き、走り出した。いや、逃げ出した。

とりあえずは逃げるんだ、捕まるまでは逃げてみるんだ。

相手は、おそらく私だって襲うだろう、

殺す気で襲ってくるのだろう。

だったら、やはり逃げるしかない、私には戦う気はないのだ、逃げるしかない。

望めるなら、戦うことがないように、私は彼女の手を掴み逃げ出した。

だがしかし、まあ、走るのは久々だ。

駆け込み乗車ぐらいにしか、使わなかった脚だ。

走り出してすぐに詰まったようにパンパンになる。

毎日の日常、繰り返す日常では使わなかった筋肉を、身体を、必死に振り動かし、

学生時代以来の全力疾走をみせた。

久々ではあったモノの、私の呼吸、走るときの呼吸というのは、ど

うにも覚えていようで、スッハスハスと言う私独特の呼吸のリズムが、身体の中を駆けめぐる。

スッハスハス、スッハスハス。

不思議なモノだ、このゲームに入ってから不思議なことばかりだ。私はなぜだかゲームの中で自分の身体を使っている。

多少の例外はあるモノの、今までのモニターゲームには無い概念。スッハスハス、スッハスハス。

妙なところばかり食いついている気もするが。

これは本当にゲームなのか、

コレは本当に、現実ではないのだろうか。

何処までが本当で、何処までが嘘なのか、

この感覚は本当か、嘘なのか。

そんなことばかりが気になってしまう。

スッハスハス、スッハスハス。

本当に妙な、期待？ 希望？

私が単純なんだろうか、私が鈍感なんだろうか、

こんなゲームの中だって、私は起こったことをそのままに感じて楽しんでいる。

スッハスハスの私のリズム。

もっと小さな彼女のリズム。

過ぎゆく草の葉、踏みしめる土。

その微かな柔らかさ、返ってくる感覚、そこに立っていることすらも、その全てが楽しい、愉しい。

そんなこんなで、私は本来の目的とは離れたところで、このゲームを楽しんでいた。

本来ならば焦るべきところ、恐怖に押しつぶされるだろうところ、ソレを私は清々しさすら感じて、愉しんでいた。

そしてまた、この世界がゲームでなければよいのに、と微かな期待を抱きながら。

『な、なんだか、楽しそうですね』

『そ、そうかな?』

『楽しそう、に、見えます』

『君は?』

『はい?』

『君はどう?』

『実は、それなりに』

『そう、ソレは、良かった』

スッハスハス、スッハスハハ。

その後のイクバクもなく、

当然のようにあっさりと、私たちは追いつかれた。

もったも、私が転んだのが原因だが。申し訳ない。

相手は男だ。ソレも大男。

大柄の鎧に、大柄の剣、その姿勢を全身に押し出したようなその姿。

私が言うのも何だとは思うが、あまり上品な感じはしない、

と言うか下品だ。

そして男は矢次に言葉を並べる。

ナンデ逃げるんだ、とか、俺がイヤだったのか、とか、

やっぱり上品な感じはしない。

『君、あの男と何かあったの……?』

『い、いえ……言い寄ってきたので、逃げて、そしたら、逆上して……』

『まあ、そうか、んー』。

男はなおも、ソイツは誰なんだ、とか、何でスーツなんだ、とか、

やっぱり俺が嫌だったんだな、とか、ブツブツブツと、

そんなことを言いながらニジリ寄ってきた。

私には武器がない、持っているのは、スーツと、セットの通勤鞆だ

け。

少女の武器では明らかな役不足は見取れる。

男の間抜けな態度に多少の余裕こそ見せられるものの、実際不利なものにはナンにも変わりはない。

ブツブツ男は言う、邪魔なのはお前だ、と。

ソレって、やっぱり私のことだろうか、睨み付ける瞳は深い嫉妬を湛えていた。

ホントにもう、逃げ出したい、二対一ではあるが、勝ち目が有るようには思えない。

ましては私が戦うなんて想像もつかない。

一応の構えをとるものの、それに何処までの意味があるか、いや、無いことは分かり切っていた。

近づくに連れ男の体格、その威圧感、迫力、それらがドンドンと増していく、

正直のトコロ、怖い。だがしかし、私が逃げた後のこの子の運命は想像するに容易いことだ。

女の子を守る、そんな勇気がいったいコノ身体の何処にあるのだろうか。

立っているのが限界なほどに、現状はめちゃくちゃに怖い、そんな私に人を守る勇気が、力が何処にある？

怖れが、先ほどまで薄れたいた死への恐怖すらも沸き立たせる。

今なら死んでも良い、そんなのは全くの嘘だった。

私は生きたい、いくらだって生きていたい！

ましてや、こんな、こんな死に方なんて絶対に御免だ！

やりたいことだってまだまだいっぱいある。

妻にも謝りたいし、仕事だってまだまだやりたい。

こんな所で死んでなんていられないんだよっ！

男はひたすらブツブツと、お前みたいなヤツが、とか、俺に逆らうな、とか、言っている。

くそ、なんなんだよ、どうすれば良いんだよ、このままじゃどうにもならないぞ！どうするんだよ！！

もう、後がないんだ、どうにかしないと、でもどうやってッ！？
どうにかって、なんだ、どうするんだッ！？

ブツブツブツブツ、さっさと、ブツブツブツブツ、ぶっ殺して。

ああ、逃げたい、もう逃げたい！

ブツブツブツブツ。

男が、私の前にたって、ブツブツ、笑っている。

ブツブツブツブツ。

お兄さん逃げて！ナンで逃げないの！彼女が叫んでいる。

ブツブツブツブツ、この女は、俺が！。

男が剣を持ち上げる、ブツブツブツブツ。

鉄板のように分厚く、太い刀身。

ブツブツブツ。

こんなので、こんなので切られたらいったいどうなる？

ゆっくりと、ゆっくりと、上がっていく。

ブツブツブツブツ。

ソレは日の光を鈍く反射して。

想像だけが先走り、赤く染まった思考にパニックを起こす。

ブツブツブツブツ。

駄目だッ！！

ブツブツ。

ココでッ、死んじゃッ、駄目なんだ！

ブツブツブツブツ。

男と、視線がぶつかった。

駄目だって言ってるだろッッー！！！！！！

ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ。

ブツ……ブツブツ……。

ブツ.....○

……………ど、どうなった？

どうなったよ？ どうなった？

私は死んでいるのか生きているのか、死んでいるのか？
ゆっくり、ゆっくりと目を開けることにする。

目が開けば、きっとソレは解ると思う、

生きているのか、死んでいるのか、解ると思う。

ゆっくりと、光りが入った。私の目に光りが入った。

生きてるのか？ と言うことは生きているのだろうか？

このまま一気に目を開いて大丈夫だろうか？

開けて、死んでいたとかは無いだろうか？

『お兄さん？ お兄さん……？』

彼女の、彼女の声が聞こえた、私はソレを掴み思い切ってマブタを開く。

日の光が写し出したのは、女の子の顔、そしてその向こうに倒れる大男。

『あれ、あれ、れ、コレは、どういう……？』

そう、こういうコトか、ブツブツ男は、倒れていた。特に、外傷も見えない。

『急に倒れたんです。いったい、どうしたんですかね』

少女は不思議そうに首をかしげる。

これは、つまり、良くは解らないが、そうだ、生きている？

ああ、い、生きてるぞ！ 生きてる！

生きてる！！

『助かった？』

『ええ、助かりました、たぶん』

少女は、笑っている。

おお、助かった！

『んふ、くふふ………』

『………？』

『は、だはははーッはーッはーッああッ！』

『ど、どうしたんです？』

『どうしたも、何も、ないじゃないか、は、ははッ』

『わ、解りませんよう』

『君も、笑えよ、助かったんだぞ、生きてるんだぞ？』

私の言葉に、彼女は少し不思議そうな顔をし、ハニカミながら微笑む。

そう、私も、そして彼女も、また笑えている。

『うはーッはーッはははーッーッ』

少女に飛び乗られたときは、もう終わりだと思ったけど、また、笑うことができている。

再び、私は笑っている。

考えることはたくさんあるかも知れない、だけど、今は、生きている、笑っていられる。

『だあーはーッはーッはーッはーッはーッはーッああッ！』

再び笑えた、ソレだけで、こんなにも嬉しかった。

まだ、こんなにも、私は生きている。

『あーっはっはっはっはっはーッ！』

『いきてるー………っ！』

立ち去る時、私はブツブツ男にとりあえずの手を合わせた。

悔やむ気持ちとかは、別にあまり無いにせよ、

何故死んだのかは解らないが、彼だって生きてはいたのだろう。

そう思うと、少しだけど、罪の意識がわいてくる。

殺されかけたんだ。思う必要はないと、意識するが、

やはり死んでしまったという事実は、重たかった。

気休めだが、自分で手をかけなくて良かった。

気休めだが、吊っておきたかった。

『なに……やってるんです？』

少女は、のぞき込むように私を見た。

『いや、コレくらいはと思ってね』

彼女はいたって不思議そう。

『なんですか？』

『ナンデって、何でもかんでもだよ』

『なんで、ゲームに手を合わせるんですか？』

『ゲームって、いくらナンでもソレはないだろう……？』

『えあ、だ、だって、ゲームじゃないですか、プログラムじゃないですか』

『だって、これは、遊びじゃないですか』

三木伸照d

俺は吐き続けていた。

身体の中の物を全て出してしまうんじゃないかってほどに。

日が落ちて、辺りが暗くなり、周囲が見えなくなってもソレが止むことはなく、

鼻からも、目からも体液を垂れ流し、もはや見る影もなく、醜い、ただソレだけのモノだった。

ああ、後悔と言うのでは生ヤサシイのだろうか、

あの時重なった男の目線が、今も脳裏に張り付き、こびりつき、焼き付いている。

死んでしまったのだろうか……。

刺しておきながらも、生きていてくれれば罪の意識が軽くなるような、そんな気がしてしまい、つつい、男が生きていることを祈り、懇願してしまう。

そんな、罪深い思い。

夜が明け、辺りが明るくなってくる。

周囲は吐瀉物にまみれ、植物は汚され、花は泣き、動物は逃げている。

こんな、偽物の世界にすらも、拒絶されるしかない俺。

それでも、ゆっくりと昇るイツワリの太陽は、

少しだけ、俺の心に光を当てるようで、

冷えきり、バラバラになりそうな体も、少しだけだけど、動きそうな気がする。

起き上がり、周囲を見渡すが、昨日の男の姿は見えない。

もつとも、見えていたところでどうする気だったのかは知らないが。とりあえずは人影は見あたらない。その代わり、言うにはあまりにもな冗談だが、そこには見たくないモノが転がっていた。

『何であるんだよ……』

レヴァンテインだ。男の肉を付けた。

ゲームの仕様なのだろうか……確かにその場に投げ捨てたはずの杭が目の前に置かれている。

『それ、アナタのだよね？』

ビクリというか、もう、ビクリというか、なんか、もうビクリ。本当に心臓が飛び出すかと思った。

俺の後には、イツからかいたのか、見知らぬ女の子が立っている。敵意こそ見えないものの、どうにもまた、奇妙な女だ。

ローブのようにも見えたその衣装は、何てコトのないタダのボロ布、薄汚れたその顔には、これまた妙な、この場に似つかわしくない満面の笑みが張り付いている。

本当にこの世界の人間なのかもしれない、そう思わせるほどに、現実味を持たぬその姿が俺を圧倒していた。

『それ……アナタのだよね？』

もう一回笑顔。

一体何なんだこいつは。

普通に考えるのなら他の参加者、だよな？

『あ、ああ、そ、そうけど……？』

とりあえの返事に彼女は全身で喜びを表す。

相変わらずに全身から怪しい、これがこの女の作戦か…？
それにしても意図すら見えない。

『はいっ♪』

そして女は何を思ったのか、裸足で、吐瀉物を踏みにじり、杭を拾い、ソレをこちらへ手渡す。
それも笑顔で。

一体どうしろというのか。
思いつきり引いている俺に、その女は悲しい顔を返す。
ソレはもう、裏切られたかのような。

『取らないの……？』

取ったら、どうなるのか……？
理解不能な女の行動に、軽くパニック状態ではあるが。
どんな状態であれ、やはり自分の身は可愛い。
あらゆる状態に備え、いや、怯え、俺は動くことすらできないでいる。

『取らないの……？』

女の姿勢は崩れない、こちらをずっと見たまま、視線すらも逸らさうとしない…。
光りのない、深い瞳は俺の身体の中すらも見通しているかのように、一種の威圧にも近い眼力を放っている。

『わ、わかったよ……』

ぱあ、っと再びの笑顔、くそ、いったい何なんだ…。
おそるおそる、手を握りほぐし、
そして思い切って杭を受け取る。

とりあえず、とりあえずは、何もない……よな。
笑顔だけが花開くように明るさを増す。

『それじゃあ、どうぞっ』

そういつて、女は大の字になって立つ。
はい、つて……何ですか？

『なに？どゆこと？』

『だから、はいっ、どうぞっ、ブサッあーとお願いしますっ』

そういつて彼女は自分のオデコを指さした。

ソレはつまり、殺せ、そう言う意味。

『……どういうつもりだよ？』

『……どういうつもり？』

『なんで、そんなこと……』

『だって、そういうゲームじゃない？』

『だってって、そうじゃない、そうじゃないだろうっ？..できるか
よそんなこと.....』

『できるよ.....？..』

『なんっ.....』

『できるって、そのおっきい釘で、もう人、刺してるンでしょ？..』

『それは.....』

『できるよ、そのくつついてるソノ肉、別にバーベキューとかし
てたンじゃないでしょ？..』

『.....』

『人間の肉なンでしょ？..』

『だから.....』

『だからできるよ..』

『できない.....』

『はいっ..』

『できないって..』

『どうぞっ..』

『無理だよ』

『早くっ』

『無理だってッ』

『ねえってば!』

『無理だって言ってるだろッ!!?』

『なんで!!?』

『なんでって』

『じゃあ何でココにいるの……?』

『……』

『なんで、いるの?なんでッ!?』

殺る気で来たけど怖じ気づいた、ソレしか答えはない。

確かに、ココにいるには動機が不純、というかあまりにも整っていない。

そしてこの女は……おそらく。

『お前は……なんで?』

『あたし?』

『そう、お前……』

『あたしは、あれだよ、あたしみたいな愚図で馬鹿でロクデナシでウジ虫で、やる気がなくて、生気がなくて、家族にも、親戚にも、友達にも役に立たないような、糞で、塵でしかない、そんなあたしに生きてく場所を提供してくれる人なんているワケ無いし……』

『わかった……』

『そもそも生きてく気力もないし、お薬代だけで家族みんなのこ
と逼迫して、精神的にも追いつめて、ソレでもグダグダとタダ生き
ながらえるだけ生きているような私がその存在だけでも限りなくウ
ザったいから、できるだけ速やかに死のうと思って……』

『解ったってっ！』

『色々死ぬベストな方法探していたら、このゲームのこと知っ
て、できるならこんなチリでも死んで役に立たないかなって思って、
誰か面白おかしく私を殺してくれればって、そうして……』

『解ったって、言ってるだろッ！？』

『解ったならああ！』

『無理だ』

『無理じゃないい！、ほら、どーぞ、できる限り楽しんで、有意
義に殺してよ！』

殺すわけには……殺すわけにはいかない……そんなこと、もうでき

るはずもない。

今のところは襲っては来ないんだ、殺さない手段なんていくらでもあるはずだ。

今は、考えて、この女を殺さない方法を……。

『早くしようよ！ココじゃお薬も飲めないからあたしの腐った脳はドンドンと、おかしくなっちゃうから！！』

こんな子を、こんな子を殺せるワケ無いだろうに……。

『何なら犯してからでも良いから！ほら、好きにしてよ！有意義に利用してよ！！』

こんな、ボロボロな女の子を……。

『何で殺さないのっ！なんで！なんっ……』

『無理だよッ！！俺には、無理だっ』

『なんでよお……簡単じゃない……』

『もう無理だ！怖い！気持ち悪い！罪の意識に、耐えられない！できるわけがない！！』

『殺して……怖いから、悪い気がしたから、もう無理？』

『無理だ』

『なに……すっかり改心しました？』

『……しました』

『殺しちゃって、思ったよりつまんないから改心しました？』

『そうじゃない』

『そうだよ』

『ちがう…ッ！』

『違かったら、こんな場所いないでしょ？』

『チガウ………』

『ちがくないって』

『違うッ！！』

『………じゃあ、良いよ、その釘かして』

『駄目だ』

『かしなさいよ』

『どーするつもりだよっ！』

『自分で、刺すに、決まってるじゃない、こうやってさブサって
さ、ずぶずぶずぶずぶ』

『尚更、貸せるわけないだろッ』

『なによ？改心したら即正義にでもなったつもりッ？ふざけないでよ！！』

『駄目だ、死なせない……』

『死なせない？初対面の私を？ 人殺しがよく言えるねそんなこと！！』

『こ、殺してない！まだ生きてるッ！』

『変わらないじゃない！アナタは人殺しよ！ ほら、もっと殺しなさい！ほら、ほら！！』

『殺さないッ！！やめてくれ！』

『何よ……好き勝手言って……』

『お、お前だってッ！好き勝手ッ！言ってるじゃないかッ！！何だよ！ふざけるなよ！嫌だって言ってるのにさ！！そんなんじや人のため何かになるかよ！！分かってンだろ！？』

『黙れよ！！人殺しッッッッッ！！！！』

ぐるり、と身体が揺れた気がした。

衝動が、全てを飲み込んで、彼女を押し倒し、杭を、彼女の額に向ける。

そうだよ、殺してやる。

こんな女、こんな女殺してやるッ。

ココなら、ココならいくら殺したって、いくら殺したって構わない

『約束する』

『……………何を？』

『お前を、殺してやる、できる限り、楽しそうに』

『ホント…………？』

『但し、すぐには無理だ、だから』

『…………だから？』

『殺せるようになるまで、待ってくれ』

『その間に、その間にあたしは他の人に頼むかもよ？』

『なら、その時は守る、俺がお前を殺したくなるまで』

『ウソッ、殺す気なんて全然ないでしょ？』

『ある、犯して、めちゃくちゃにして、ぐちゃぐちゃにして、そ
んで楽しんで、殺してやる』

『…………』

『お前を“有意義”に殺してやる』

『……………』

『お前を殺す』

『……………分かったよ、やってみればいいよ、私も楽しく殺してもらえるよう、振る舞うから』

『そう、か……………よかった』

安堵のため息が心の奥から漏れる。

そして、俺はその安堵と引き替えに、ひとつの約束をしてしまった。人を、彼女を殺すという約束。

ソレは、そう遠くない将来、訪れることも知れない。

もしくは、俺が死ぬまで訪れないかも知れない。

少なくとも、この場を納めるための大きな代償となった。

そして、そしてもう俺はもう人を殺してはいけない、なんてコトは言えないと思う。

彼女へと振り上げた杭が、全身を沸き立たせ、

俺は、自ら、彼女を殺そうとしていた。

見開いた目から涙がこぼれる。

後悔と、もう戻れない苦しみが、シズクとなってこぼれ落ちた。

『ありがとうね、ちゃんと私を、殺してね』

振り向くとそこには、彼女のあの笑顔があった。

彼女の名は浜川小梅。

自己紹介するときの彼女は、不味そうな名でしょ、と口を酸っぱくした。

三木伸照d（後書き）

拙さの染み出た長編処女作となりましたが、ココまで読み進めていただき、本当にありがとうございます。御座います。

とりあえずは今回のお話で1章にあたる部分は終わりとなります。今後は一章の再びの推敲を行った後、2章以降を書き進めていければと思っています。また、他の作品とかにも手をつけていけたら良いですね。

グロテスクや、残酷な表現が多いかもしれませんし、テーマ等を持って作品を書きたがる習性なので、

色々とうざりたい、読みにくい内容になることも度々あると思いますが、

どうかコレからもおつき合いいただけるとありがたいです。

また、テーマとかはあるものの受け取り方は千差万別、読んでくださる方々の解釈に任せたいと思います。

ソレでは最後にもう一度、

ココまで読み進めて下さった方々本当にありがとうございます。御座いました。

潮崎二郎 a

全国のテレビに岸防衛大臣の会見が写し出される。

無数のカメラフラッシュに覆い被され、その表情こそは読みとれないが、

ただ、ひたすら、誰かに謝っているように見えた。

ソレが誰に謝っているのかは、勿論俺の知り得るところではなかったが……。

会見が終わり、会場から退席する際に、一人の男が大臣に近寄り、耳打ちする。

ソレを聞いた瞬間大臣は目を見開き、そして

顔を覆い、泣き崩れた。

このゲーム、何としても叩き潰さねばならない。
何としてもだ。

『お二人とも、ご苦勞様でした。岸大臣、それに三木さん』

会見を終え、傷心を隠せぬままに二人は帰ってきた。

三木さんも、警察を代表しての会見に出席していた。

自分の息子がゲームに参加したことを全国民に示し、そして謝罪した、その後今回の事件を解決をもって集結させると約束し、解決を持って辞職するとした。

警察官としての立場を持ちながらの息子さんの行動は、彼の目には

どのように映っているのだろうか。

『現在、身元が確認できているのは……伸照君、そして……スイマセン、留美子さんのお二人だけです』
娘の名前を聞き、大臣の身体が傾く。

少しの話題に触れるにも、俺は慎重に棘をハラわねばならない。

『それで犯人の……目星は？』

『久米……』

『久米？』

『ええ、まあ、チョト、好きな名前じゃないんですけどね……アドレスを解析した所、東京電子技術大学元教授の久米豊氏のモノであることが判明しました。そして、同教授は一年前から失踪しています。ですが……アドレス本文にk u m eの文字があったコトから教授が日常的に使っていた物が使用されたという線が強く……まあ、主犯の可能性は低いですね、憶測の域は出ませんが。現状では協力者か、あるいは強制的に技術協力を、とか、そういう線が強いです』

犯人を捜す、警察のすべきはそれだが、本当にソレで参加者達は助かるのか、

前代未聞、そうとしか言いようのない今回の事件に誰も彼もが焦り、苛立っている。

対処法の前例が無いんだ、ソレも仕方がない。

この件には、国連からもサイバーテロのスペシャリストとやらが技術提供をしてくれることとなっている。

言ってみれば次世代のPKOみたいなモノだそうだ。

とは言うものの、先進技術を駆る彼らでさえ、今回の件は相当の規模だそうで、どちらにしても状況の不利は動きそうにはない。

まあ、まず気を配るのは目の前の問題か……。

『息子さん、伸照君の件、了承していただけるんですね？』

『……え？ ……あ、ああ……大丈夫だ』

息子と聞くと、どうにも歯切れの悪い三木さん。

額に手を当て、うなだれ、ため息を吐き、そしてまたうなだれる。見ているだけで痛々しいが、今の俺に彼を立ち直らせる言葉などあるはずもない。

『辛いのは、分かりますが、ええ』

『分かって……分かってる、息子の尻拭いぐらいは父親がしないとな……』

対策本部は抗議や、質問、その他もろもろの電話でパンク状態だった。

FAXも止まることなく動き続け、用紙を吐き出し続ける。

ノイローゼになりそうな状態だったが、この山の一角に解決の糸口があるのではと思うと、

どれ1つとして投げるわけにはいかなかった。

『三木伸照、到着しましたッ！』

伸照君の件、ソレは彼のニューロネットワークを媒介に、ゲーム内の彼との会話ができないか、と言うこと。

UNの方々の提案だったが、三木さんはすんなりとは首を縦に振れなかった。

息子の身体を使うと言われれば、まあ、当たり前だとは思う。

どのみち結果的には、立場的か、人格的か、半ば強引に押し切られる形となり、

先ほどまでも言葉を濁す、そう言った現在である。

伸照君は回線を維持したまま、つまりはPCに繋がれたまま運び込まれた。

心拍、呼吸共に正常、駆け寄った三木さんは、とりあえずの安堵をみせているように思える。

先日学校へ出掛けてから今まで、一度も出会っていないわけだから、

意識こそ無いものの、生きているだけで今の彼にはどれだけ喜ばしいだろうか。

そして彼の傍らには、何処の誰だろうか、見知らぬ長身の女性がいる。

『彼女は？』

『例の、国連の』

『あ、あー成る程ね、直接来てくれたんだ』

女性はすらっとしたスタイルに、長いブロンドの髪、細長の眼鏡からは聡明な印象を受けた。

その上で比較的ガツシリとした作りの制服が、妙にアンバランスな印象を与えている。

『えとHello……？』

『あ、いえ、お気になさらず、日本語はダイジョブですよ』

『あ、そですか。スイマセン英語はサボってたんでどうも苦手で、あーと潮崎、二郎です。宜しく』

『ジュリエッタⅡジャクソンです。ヨロシクお願いしますね』

そう言った彼女は名刺を取り出し、俺は笑顔で取り繕う。

握手を求めた手はすらりと細長く、ソレだけで手先の器用さを連想させるほどだった。

日本語の方も、多少のイントネーションはあるものの、ほぼ完璧に近く、

才色兼備と言えるほどの、完成された印象を見せた。

『それで、イキナリで申し訳ないのですが……本題のー伸照君のアクセスの方ですが』

『あ、ええ、順調ですよ。あと30分もあればつながると思います』

す。それで、ソレまでの時間、少しお話ししておきたいことがあるのですが、えー、ココのボス？」

『あ、いえ、それは私じゃなくて……ボスは、あっち、いえ、あの、ではなくて、いやその隣の、ああ、はい、その人です。……えとー、ボスに、ご用件？』

『ああ、いえ、ボスにアナタをお借りしに……』

誰も彼も、そしてどこもかしこも騒がしく動き続けていた署内では、

思いの外静かな部屋が見つからず。

いきなり話のコシを折られたような気がした。

ようやく見つけた個室に腰を落ち着け、話とやらは始まった。

『マズですが、えっと、久米教授については？』

『それは……はい、こちらでもある程度はたどり着いています』

『ですか、では、こちらの人物についてはどうでしょうか？』

そういつて彼女は、2枚の写真を取り出す。

それぞれに一人ずつ、女性が写った写真だ。

一人は黒髪、顔は日本系だが真っ白な肌がその中で異質さを放っている。

もう一人は、ブロンドの外人、ショートヘアがよく似合っていた。

『こちらは……？』

『白瀬響子クレンペラー、彼女は学生当時久米ゼミの生徒の一人でした』

『久米ゼミの？』

『ええ、優等生でしたよ、いろんな意味でね』

そこには学生時代からの繋がりを感ずる。

それこそ、事態はメールにもあったとおり、相当の昔から準備されていたコトなのかも知れない。

『で、あーそれで、こっちの写真は？』

『それは……私です』

そう言われ、もう一度写真と彼女とを見比べた、確かに艶やかなブルンドや、大まかな顔の作りは一致しているように思える。

だが、整形でもしてるのか、言われずに気づくには少々難しいかも知れない。

見えて姉妹と言うところだ。

『順を追って説明します。まず……私が今回この件に派遣されたのが、その写真の当時、私も白瀬さんが在学していた久米ゼミの生徒だった、と言うことによります。その後私は国連の方に、彼女、白瀬さんは久米研究所に残りました。最近のことはともかくとしても研究内容、関係するスタッフその他……少なくとも相手の内情に一番詳しいのは私だと、そう言うコトです』

『ソレで、その結果が、このクレンペラーが怪しいと？』

『ええ、彼女とは卒業後も文通を続けていたのすが、一年前からソレも途絶え……こういう形で再び彼女を捜すことになるとは思いませんでしたけどね』

『成る程、久米失踪と同時期……か。まあ確かに怪しくはありますね』

決定的な証拠こそ無いモノの、これほどの事件を引き起こせる人物はそう多くはない、

ネットの海という広大なフィールドでの犯人探し、当初は絶望的かと思われていたが、

予想は良い意味で裏切られ、ピースは順調に集まっていく。

だけど、ただどだ、どうにもしっくりこない。

順調であるに越したことはない、が、しかし、ソレが逆に違和感すら産んでいるよう、

ピースが自分から集まってくるような、そんな奇妙な感覚が頭から離れないのだ。

コレは、本当にこれだけの事件なのだろうか、本当はもっと、何か違う、他の何かが……。

『……で、それで、何で俺なんです？時間まではまだ結構あると思いますし、こういった話は三木さんに直接話した方が……』

『ですね、確かにそうです、ではそろそろ“本題”に移りますか？』

『本題？今までのではなく？』

『そうです、まあ、今の話も話さなければならなかったのですが、とりあえずはクッションとお考え下さい』

『はぁ……』

『潮崎さん、私実は、アナタに1つお聞きしたいことがあるんですよ』

『私、に、ですか？』

『そうです、あなた、アナタもしかして……』

『本当は、久米、と言う名前に心当たりがあるんじゃないですか？』

俺は、身体を内側から驚掴みにされる気がした。
いきなり……何を言い出すんだこの女は。

不意を打たれる質問に、冷静を崩され、呼吸を締め付けるような圧迫感が身体を離れようとしなない。

『質問の、意図が、読めませんが……ソレと今回の事件に何か関係が？』

態度を崩すな、いつもの、いつもの俺であれ。

『質問の、返答が、なされていませんよ？』

『……あの事件に、関係しているんですか？』

『どの、事件ですか？』

『ふざけないで下さい』

『ふざけて何ていないですよ、どの事件ですか？』

『……8年前の、大海ヶ丘小学校占拠事件……』

『その事件の、何を知っていますか？』

『その、その件の唯一の被害者の名が……久米だ』

脳裏に、どうしてもコビリついて消えない1つの記憶。

もう、とうの昔に終わったと思っていた1つの記憶。

俺の警官人生、唯一にして最大の汚点が、今回の事件とつながっている……？

『あって、あったとしても何だって言うんだ？久米なんて、あり

きたりな苗字じゃないか、たまたま同じだっただけだろう……!?!?』

『ごもつともです。まだ、何処まで関係しているのかは分かりません、ですケド、この二つの件、間違いなく何処までかは関係しています』

『久米豊に……』

『はい?』

『久米豊に子供は?』

『いますよ、正確にはいました』

『名前は?』

『もう、分かってるんじゃないですか?』

『名前はッ!?!?』

『……名前は久米、武陽』

『8年前の小学校占拠事件で、凶弾に倒れた唯一の犠牲者です』

『そして……潮崎二郎さん、あなたは彼の最後を目撃した、唯一の目撃者ですよ？』

『単刀直入に言います』

『潮崎さん、あなたがこのままこの件にかかわり続けるのは危険です』

『このままでは、あなたも、死ぬかも知れませんよ？』

会話が途切れ、部屋はしんと静まり返る。

空気すらもが彼女の言葉に聞き入っていたようで、

ごうんごうんと、鳴り響く空調の音だけが強調されて耳に届く。

そして彼女は、意味深な、不敵にすら見える笑みを俺に投げかける。

馬鹿げたことに、あまりにも馬鹿げたことに、

この女は俺が死ぬかも知れないと、そういった。

30分後予定通り、伸照君へのアクセスが実行された。

表面上は何事もなかったかのよう。

作業にはジュリエッタと他スタッフを含め、俺、三木さん、そして岸大臣が同席した。

基本問題は無いと思われるが、ソレでもモシモのコトは何時だって起こり得る、と彼女は繰り返し念を押していた。

ヘッドギアに繋がれた無数のコードが、伸照君の頭へとつながり、それが、ゲームへの、そして彼への扉をこじ開けてくれるか否か、正直のところ、俺には何一つ解りそうもなかった。

『これより、三木伸照のニューロンネットワークへのアクセスを開始します』

ジュリエッタは細く深呼吸をし、周囲の空気の反応を待った。

『それでは、皆さんご協力をお願いします』

三木伸照 e

『があっああああああッああああああおとおおおッ
!!?』

突如襲った頭痛に、俺は倒れ込んだ。

『ちよっ、ど、どしたの!? 腹痛? やっぱこの世界のモノ食べちゃマズかった!?』

いや、違っ、いあッおッ!?

『あああおおおおッ!』

『おわっ、あえっ、おわっ!?!』

あわてふためく小梅を後目に、転げ回る俺、その姿は何処か滑稽だった。

『あああッああーあー……あー…………あ』

『だ、ダイジョブ?』

『あ、ああ………………だ、ダイジョブだ、大丈夫』

『でもさゴメン、胃薬とか持っていないんだ』

『いや、だから、さ、頭痛だって』

モノの数秒で痛みはすうと治まり、後には何事も残らない……。

『で、なんだったの?』

当然な疑問だが、そんなの、俺が知るわけがない。

叩くようではなく、刺すようでもなく、どちらかというとしメ付けるような痛み。

首を振って、肩を回して、やっぱり特に何ともなく、得体の知れない偏頭痛など、やはり気味が悪い以外の何モノでもな

かった。

『……って、あれ？小梅……お前なんか言った？』

『え、いや、だからなんだったのって』

『いや、ソレじゃなくて、他に』

『ほか？』

そう言ってる間にも、また、聞こえる。

『ほら、今、いま何か言ったか？』

『え、いや、言っていないけど、もしかして幻聴？ 葉とか？ ヤク？』

『いや、やってるワケ無い、やってない……けど、声が聞こえる……？』

『いや、いやいや、やっぱりソレ幻聴だよ！アナタヤク中だったの？』

その声はゆっくり、ゆっくりと、大きくなっているような、そんな気がする。

ソレは木霊するように、反響するように、頭の中で繰り返し反射し広がっていく。

ゆわああああああつと。

『ちょ、静かにっ！』

『なによヤク中！』

『うるさいッ！静かにしろってッ！！』

何て言ってる？ いったい、何て……？

《……えま……か？》

《……君、聞……えてい……すか？》

《聞……えて……返……し……さい》

『きこえて……………?』

《聞こ……………ますか?》

『え、な、何? ナニナニ?』

『お願いだ……………少し、静かにしてくれ……………』

声は、女の人だ、電子音と雑音の混じったその女の声は、繰り返し、繰り返し、こう言ってる。

聞こえていますか、聞こえていますか、と。
聞こえて、いますか……………っ!?

『あ、あ、き、聞こえていますッ! 聞こえていますッッ!』

条件反射的に叫んだソレは、相手の所にはとどいたのだろうか?
驚く小梅を尻目に、俺は何度もその声に呼びかけた。

ソレは、俺の目には蜘蛛の糸のように映ったかも知れない。

深く暗い、ネットの地獄の中にタラされた一本の糸、

白く透き通るように輝くそれに、俺は、つかまることができたのだ。
もしかしたら…助かるかも知れない?

《良…った……………。無事で…ようか?》

『あ、と、とりあえず今のところは……………え、と、どちら様です?』

《私たち…警察です》

『警察?』

《はい、今と…りにアナタの父親もい…す》

そう、糸をたらしていたのは他でもない父。

安心から一転、気マズさに言葉が出なくなる。

仕方ない、途方もない迷惑をかけたであろう父が、突如目の前に現れたのだから。

仕方ない、切り放したと思っていた日常が、ナンと自分を救いに来てくれたのだから。

『と、父さん……ですか?』

《はい、今代わり…すね》

『ちょッ、とッ! ちよっと待って下さ……あ………と、父さん……?』

《ああ……今…わった》

『ホントに……本当に……父さん?』

《ああ……ああ》

『父さん………』

《……》

『御免なさい……』

《ああ……………》

『俺…………』

《人を…………》

『なに…………？』

《人を、傷つけたか？》

『人を…………？』

俺の顔は、引きつっていたかも知れない。
後ろめたさを押し隠した、そう言った顔を。
だって、だって仕方ない。
まだ見てるんだ、あの男の空疎な瞳が、
まだ見てるんだ、小梅のあのまなざしが、
俺はあの杭で、人を……。

人を……………ッ。

『傷つけては…………いないよ』

《……本当、だな……？》

声に見られる深い安堵、こんなにも心地悪く、辛い安堵。

『本当、だよ。もう、怖いよ、だから、そんなこと、できるワケ無い。だから、人を、傷つけては、いないから』

一言、一言、カサねるごとにその重さは増していく。

ソレは身体が動かなくなるほどに、ずっしりと、俺の身体を蝕んで放さない。

小梅は、俺の発する言葉の、その意味を解きほぐそうとするかのように、

こちらを見ている。

光りを持たぬ、あのエグルような視線で。

ナンデだよ、何でこんな、みんな違うコトばかり俺に求めるんだ……。

もう、偽善は死んだ、人を殺さないなんて通用しない、そう確信したばかりではなかったのか……ッ!?

《色々……聞きたいこ……も残っているが、それはお前が帰ってきてからにする。今はどうやってでも生きて帰ってくれ》

一言一言、吐き出すように紡いでいく父。

その声は、かき消えてしまうんじゃないか、そう思うほどに掠れていた。

俺はジュリエッタさん、潮崎さんからの指示を受ける。

警察からの直接の指示、だ。

できる限り隠れているコト、身を守り逃げることを最優先にするコト、殺し合いにはできる限りかわらないコト。

殺し合いの意思のない人間はできる限り保護するコト。

父が、警察を辞めるコト。

留美子さんのコト。

警察は、プレイヤーの保護を最優先とするコト。

そして、その罪は救出後に判断するコト。

罪……俺はその言葉を考えていなかった気がする。

それは、少なくとも、ゲームに入る前は喪失していたのかも知れない。

だけど、コレはどうしようもなく罪だった。

俺が考えていた結末は、勝者となり世界を手に入れた俺か、

もしくは、力及ばずゲームの中で力果てた俺。

そう、現実へ帰った時のコトなんて、コレっぽっちも考えていなかったんだ。

《そして………伸照、お前も例外ではないからな》

そう言った父は泣いていた。

すり切れるように、父は泣いていた。

声を押し殺すように、噛み殺すように、

俺に、聞こえないように。

《すまない………また後で連絡する》

その言葉を最後に、父との会話は途切れた。

そして、俺は再び深い後悔をする。

俺は、気付きたくないことにも、わずかながらに現状を楽しんでいる。

それは、まるで、ゲームの主人公みたいに。

ゲームのプレイヤーみたいに。

殺し合いのゲームから人を助けて脱出しよう、

こんなの、まるで、ホントにゲームのようだ。

現実の話じゃない。

自分の思いに後悔し戸惑うモノの、その思いは止まることなく、

なんだろう、ワクワク……？

それに近いような感情が、喜びが沸き立つような、困惑するような期待感が、

ほんの微かだけど、しかし確かに俺の身体の中に溜まってきている。

『……誰？』

ずっと、ずっとこっちを見ていた小梅が、そっと聞いてくる。

全てを疑うようなその瞳、全てを見透かすようなその瞳。

『父さん……警察だ』

『警察の人が、何？』

『助ける方法を、探しているから、逃げてくれって、隠れてくれって、生きてくれって』

『で？』

『解った、そう言った』

『言うこと……聞くの？』

『………聞かない、よ』

『聞かないの？』

『ああ』

『じゃあ……？』

『ああ、あれは、答えたことは、全て嘘だ』

『う……そ………？』

その言葉に、彼女はにんまりとまたいつもの笑顔を返してくれた。それは、決して本物とは思えない安堵を俺に与えてくれる。

自分を選んだ俺に対してか、

死ぬるコトへの喜びか、

あまりにも、光りのない不気味な微笑み。

俺には、彼女の考えるコトなんて、解りようもなかった。

『大丈夫だよ、ちゃんと殺してやるから』

ただ一つ、手綱の握り方を除いては。

そう、俺は、全てに嘘をついた。

結果的に、誰もが俺に期待をしている。

生きてくれること、殺してくれること、

正反対のことを、期待している。

俺はもう、最低だよ。

そう思う気持ちだが、強く、長く持たない。

芽生えていたはずの己への自己嫌悪にも似た感情、その悔しさや苦しきというモノも消えてきてしまっていた。

俺は、一体どうなっているんだ？

この世界に来て、どうなってしまったんだ？

俺の、思いは？ スタンスは？ 俺は？ どうなってしまったている？

そして、俺は、他の全員の思惑を外れつつ、異なった方向をへと進んでいく、

誰も望んでいない方向へ、全てを振り切るように進んでいく。

いや、正確には、俺は何処へも進めていなかったのかも知れない。

俺は、帰れるのだろうか？

それとも、もう、帰れない？

帰る方法がない？

帰れるわけがない？

帰りたくない？

帰ろうとしない？

帰る意味がない？

これ以上、苦しみたくない？

罪に、問われたくない？

俺は、どうしたい？

再び俺は、決断を迫られていたのかも知れない。

カンダタが掴んだ糸は、あまりにも偽善的に感じた。

みんなで助かりましょう、そして、俺の目の前にも同じ糸がタレれている。

極楽へ昇ろうとしたカンダタは、糸を独占しようとして奈落へと落ちた。

だけど俺には、糸を握らず、奈落で生き抜く選択肢も残されているのだ。

このゲームの勝者は一人しかいない。

それ以外は、みんな、死ぬしかない。

ソレは、奈落の奥底へと続いていく蜘蛛の糸のようでもある。

三木伸照 f

歩く、歩く、歩く。

俺達は歩いてた。

ダレからも解るように、隠れることもなく、歩いてた。

誰かが襲ってきたら、誰かを見つけたら、そう言う“もしも”は考えることなく、

タダひたすらに、歩き続けていた。

『どうするの？』

『べつに』

『どうもしない？』

『……ああ』

『敵が来たら、どうするの？』

『知らない』

『私を、どうするの？』

『知らない』

『何か知ってることは？』

『無い』

『そう……』

正確に言えば、現状では何も決められなかった。

誰かに会わないと、誰かと戦わないと、考えているだけでは自分が張り裂けそうで、

タダ隠れて待っているコトなんて到底できそうにはなかった。

願わくば、誰かが助けてくれないだろうか、そんなことを思いながら、自分から逃げるために、敵を追っていたのだ。

モチロンのこと、そんな救世主はこの世界にはいないのだが。

『あ……っ』

『どした?』

『人』

『ヒト? ……ドコ?』

『あっち』

『あっち……? ってどっちだ?』

『そっちだって、ほら、そこ』

『どっちだよ』

『倒れてる』

『あっ、ああ、ああ、あー……いたな』

『どーするの?』

『どうってなあ……』

『どーするの?』

『ひとまず、とりあえず』

『どーするの?』

彼女は、じりじり睨んでいる。じりじりじりじり睨んでいる。

『声を掛ける』

『なんて?』

『生きてますか、とか? 知るかよ』

『まあ……別に良いけど』

『良いか?』

『良いって』

『解った、決定だ』

駆け寄ってみると解るが、倒れていたのは女性だった。
理知的な表情と、ソレに相反するような、どこかアフリカの部族にも

見える半裸の衣装。

身体に巻き付けられた拘束具のような金属の塊が、よりいっそうアンバランスさを引き立てている。

何て言うか、こう、エッチな感じだ。

『なんだかな……えー、あー、もしもし、生きてますか？』

返事は……ない。

脈を計ってみようかとも思ったが、テレビとかで見るほど簡単では無かった。

まあ、とりあえず体温だけはアルらしく、うっすらとした呼吸も見て取れた。

だがまあ、全体的にやり場に困る。

『ん、ー……どうすつか』

『釘』

『ん、何？』

『釘、貸して』

『何で』

『知ってるんでしょ？』

『じゃ、駄目だ』

『……………』

そして彼女は、思い立ったように女性の傍らへ駆け寄り、ゆっくりと座り込む。

頬にすつと手をやり、そして、その首に、両手を押しつけた。

ぐぐぐぐぐぐぐぐぐ。

ぎぎぎぎぎぎぎぎぎ。

押された首は肉々しく押し潰れ、女性の呼吸が目に見えて弱くなる。ソレでも、彼女は眠っているように反応しない、ただ、力強く押し

つけられた頭が、少しばかり持ち上がるだけだった。
そう、このままじゃ、死んじやうな……。

『なんでだ？』

『だって……』

『だって？』

『だって殺さないと、三木君は助けちやうじやない？』

『……』

『そしたら、私を殺してくれないかもじやない？』

『……』

『人助け何てしたら、キミは、良い人になっちゃうかもじやない？』

『……』

『だから、そんなのやだから、キミは心変わりしやすいから』

『……』

『そんなのやだから……』

『んだよ、結局自分のためじゃん』

不意をつかれたように、彼女の腕から、すっと力が抜けた。

『自分のためじゃん、何が役立てて殺して欲しいだ、結局、自分が、死にたいだけじやないか』

『ゴメン、あたし、嘘ついたかも』

『……』

『ゴメンね？』

『……』

『ゴメン、ね……？』

『……』

『ごめん』

『……』

『ごめん……何か言つてよ』

『……』

『ごめんってば!』

『………ソイツ』

『ん……?』

『そいつ、気がついたぞ』

『え……』

女性は大きく咳き込んで、ゲボゲボ、咳き込んだ。

ゲボゲボ、グボ、ガボボ。

駆け寄ろうとも思ったが、何か、興味を失ったように、見ていることしかできなかった。

ひとしきり、咳き込んで、呼吸がゆっくりと戻ってきたようで、ガホッと大きく吐き出し、カッとその目を見開いた。

『あ………あ………』

『大丈夫か?』

ゆっくりと近づく俺、小梅ものぞき込むように彼女の顔を、瞳を見る。

見開かれた彼女の瞳は、わなわな、わなわなと震え、ふるえて。

『逃げて』 女性はそう、叫んだ。

その瞬間、小梅の顔が大きく歪み、身体ごと、宙に弧を描き、飛んだ。

大きく浮き上がった彼女の身体は、地面にすり切れるように転がり、止まった。たばば、つと血が遅れて空を舞う。

『……ウメツ!!!!!!?』

あまりに突然で、目を疑った。

そして、何を把握する間もなく、その女性はこちらへと襲いかかってくる。

獣のように、四つん這いで地を這い、猛獣のように牙を立てようとした。

——ッガ

とっさに振り抜いたレヴァンティン、それを、あろう事か、女は歯で受け止める。

歯が折れ、溢れんばかりに血が噴き出しても彼女は放そうとはせず、武器を取り押さえたまま振り下ろした拳で、そのまま俺の手からはたき落とした。

ぐらり、ぐらあ、と、不自然な姿勢で立ち上がり。

ぎんぎんと光る瞳で、こちらを射殺そうとする。

『ふあ、は、ふあやく!! 逃げて下さい!!!!』

先ほどからそう言うのは獣の女。

叫ぶたびに口から血が噴き出し、あまりに痛々しそうなその姿にも女は顔色1つ変えようとしない。

『はや、くッ!!』

『襲ってるッ、ヤツのッ、科白か!』

『何でも、良いから!! はやく!!』

言いながらも、女の拳が、一閃、二閃と、俺を小梅のように吹き飛ばそうと、襲ってくる。回避ではない、一方的に逃げ回り、地面に脚をとられながらも小梅の傍らへと滑り込んだ。

彼女の身体は、地面にうち捨てられるように転がり、急ぎ抱き起こすも力はなく、頭はぐったりと後ろに折れる。

彼女の額は崩れるように凹み、ぐつぐつと血が噴き出していた。辛うじて息はあるようだが、見て解るほどに彼女の顔は青ざめていく、

これで、こんな所で、死んでしまうのか……？

『わ……たし……生きてるの？』

『ああ、生きてる』

『どう………しよう』

『おい………？』

『どうしよう……怖いよ、また怖くなっちゃうよおっ………』

『おい、落ち着けて』

『なんで、ひと思いに死んでくれないの？　なんで、いつも、こんな………』

『落ち着け小梅っ！』

『なんでッ！！　焦がれる程に死にたいのに！　なのに！　ナ
ンでこんなに怖いッ！！？』

彼女の手が、バタバタと宙をもがき、俺の身体をまさぐるように這う。

驚くほどに冷たい手、何がそこまで彼女を凍えさせているのか、俺の腕を掴んだソレは、そのまま自分の首へ押しつけた。

『殺おおお……しっ……てよッッ!!!!』

『止めろ!』

『今……な、らああああ……殺せ、る、よおおお!!!!! 絞め
れば、それ、で、お、わるじゃな……いッ!』

『誰が、誰が、お前なんて……』

『もお……嫌だよ、嫌なんだよお、こんな世界なんて、こんな痛
みなんて、こんな身体なんてえ……』

『……』

『苦しいのは……嫌だよお……』

『……』

『楽に………させてよ………はやく、終わらせてえ、よっ………』

『小梅………』

『怖い、ん、だよお………』

『なんでだ?』

『なんで、って………』

『お前に、何があった?』

『そんなの、全部、私が悪いから……』

『お前が？』

『私が、全部、悪い、からああ……死んで、しんでえ、謝らせて下さい……私が死んだら、きっと、みんな、笑ってくれるから……喜んで、くれるからあ……だ、から、死なせて下さい、殺して、下さい……』

『そんなこと……』

『無い？ ワケ、無いよ……私は弱いし、ズルだし、卑怯だし、いい加減で、約束は、守れないし、頭も、悪いし……いつも、自分のことばかり、しか、考えられないから………いつだって、みんなに、嘘ついて、嘘ついて、嘘、ついて……嘘、ついてえ………私なんか、死んじゃえば良いんだよ………』

『………』

『だから……ゴメンナサイ、生きていて、ゴメンナサイ』

そして俺は、ゆっくりと、彼女の首に手を掛けた。

何かが終わったように、1つを諦めたように、

今の俺には、こうしてあげるコトしか思いつかなかった。

これが、こんなことが、彼女を救うことにつながるなんて、

そんな思いはカケラもないのに、

今コノの悲しみを終わらせること、

その事が、どんな事実よりも重要な気がした。

『か………あ、は』

息が詰まっていき、命が削られていき、
それでも、小梅は必死になって、ぱくぱくと、空気を求めていた。

『い……………あ、ああ……………』

口では言っている、身体は正直で、
彼女は、必死に生を求めている。

『や……………』

その目は、もう、何処も見えてはいない。
黒すぎる瞳が、貫く眼光が、それら全ては、既に弱々しく、そして、
とても、人間らしかった。

『い……………あ……………』

色づいてきた死の香り、ゆっくりと、空気をかき集めていたその動きも止まり
そして、ゆっくりと、ゆっくりと。

『……………ごめんな』

そして、その瞬間、俺の身体は宙に浮いた。

強い衝撃が、身体を打ち抜き、内臓がぐると回転した。

血が、口から、傷からあふれ出し、

糸が切れたみたいに、張りつめていた全てが、切れたみたいに。
俺の身体は、浮き上がった。

小梅が、遠のいていく。

殺さなきゃ、俺が殺してやらなきゃならないのに、
これでは、また、小梅が苦しんでしまう……。

伸ばした手は、虚しく宙をかき、決して彼女にとどくことはなかった。

ごめんな、俺は、まだ、殺せそうにはない。

井口小百合 a

ナンとまさか、こんな所で私の人生が終わってしまうなんて、そんなことは、これっぽっちも思っていなかったワケでして。

残してきてしまったコドモたちに、

最後まで、ちゃんと見て上げられなくてゴメンネって、

謝ってあげたい。

中途半端な大人でゴメンナサイって、

謝ってあげたかった。

『ここでいいかな?』

私は、久々のひまーな休日、久々な友人と約束し、久々の楽しい時間を過ごしていた。

辺りも暗くなってきて、すっかりいい大人になった女同士、大人なトークで飲もうじゃないか、と、暗がりの街を散策している。

『い……そべ屋?』

『そそ、なかなか悪くないよ』

『なら、決定』

『ういす』

はきはきとした店員の声に迎えられ、私たちは御座敷へと案内された。

こぢんまりとしたお店だけれど、雰囲気は悪くないと思っている。たしか、そう、新任の時の飲み会も、ココでやったのだった。

『がー、つかれたね』

『あはは、疲れた』

『どんぐらい歩いた? 万歩計でも付けてれば良かったね』

『ほんと、そろそろ健康にー、とかかね』

『嫌な話だ』

『ほんと、若くないかもなー』

なんて言いつつ、とりあえずビール、とか言う年になってしまった。

おう、私の青春とかは今どこへ。

『綾瀬、今仕事はどう、忙しいんでしょ、あれー、テレビも見たよ』

『やや、どうもです、てかナンかハズイなー、アレを見られてるって』

『んふふ、まあ、そう言う商売じゃないの、私だって驚いたよ。アイドルなるー、何て言ってたあなが、気がついたらお笑い芸人になってテレビに出てるんだモン』

『まあ、なんですか、挫折と復活を繰り返しながらの人生だったよ、とりあえずはお茶の間のアイドルには慣れたカモ、みたいな』

『まるでもう終わりみたいな言いぐさね』

『いや、もう終わるかも、仕事も、最近無くなってきたし』

『かー……』

『んへへ、あたしゃトークも上手くないしねえ、一発芸のひよつ

と出だから、寧ろ半年もテレビ出ていたことが不思議かも』

『あなたらしくない弱気なお言葉』

『んー、いろいろと弱ってしまったかもしれん』

『まあ、みんなそんなもんかね』

『そうだねえ……』

『ん、どしたの?』

『あ、あん、ん、あのさ……』

『おう?』

『いや、まあ、何でもないや、それよりあんたはー? 教師として、ちゃんとコドモ見れてんの?』

『あー、まあ……ぼちぼち?』

『ぼちぼちー? あーあー、あんたの教え子かわいそー』

『失礼な、コレでも人気の美人教師だぞ?』

『へいへい』

『うゝー……』

そんなこんなで、ぐいとビールをあおった。

喉を流れる感覚が、身体を潤すようで、それでいてまた、ほんのりと火照っている。

いつからかナー、ビールが美味しく感じるようになったのは。

新任の頃はまだ、あんまり飲めなかった気がするのに、

今はもう、すっかり命の水になってしまった。

いろんな事が変わって、いろんな物がなくなって、私はすっかりオバハンの入り口の立ってしまった。

『んー』

『だいじょぶ？』

『んー』

『あん、ごめん、んー、まだ引きずってた……？』

『何を？』

『あー、あー、いや、ゴメン、言うんじゃなかったかな。いや、教え子可哀想……とかさ、アンタも昔いろいろあったから』

『あー、んー』

『いや、ゴメン』

『いやいや、まあ、別に良いけどさ、事件だって8年も前の話だし、今更なんだって、コトなんだけどね』

『んーそか、もう8年になるのか………大海ヶ丘だったよね』

『うん、あれさー』

『なに？』

『その大海ヶ丘の話なんだけど、今度さ、また、大海ヶ丘の方に、行かなきゃ行けないんだって』

『転勤？』

『まあ、一種そうみたい』

『大丈夫……？』

『微妙、かな』

『ん、まあ、ムリするなよ、やだったらやめちまえ教師なんて』
『うん、そうする』

『そうしな、そうしな、8年も苦しんだんだから、今止めても誰も何も言えないよ』

『かな』

『だよ、だよ』

『かなー』

『おう』

『んー、あのさー、話が少し変わるんだけどさ?』

『ん?』

『今見てる子に、成富君で、いるんだけどさ』

『うん』

『その子がさ……ナンか、似てるんだよね』

『誰に?』

『武陽君』

『武陽君って、大海ヶ丘の……?』

『んー、あの時、私のクラスで受け持ってたんだけどね、大人びてるって言うか、超然としてるって言うか、年相応でないって言うか、そんな感じなんだよね、どう育てればあーゆー風になるのかな、とか』

『まあ、考えるな、考えるな、あんまり、良くないって』

『別に、そう言う意味じゃないよ?』

『どういう意味でもだよ、タダでさえあそこに戻るんだから、ヘタに関連付けて引っ張らない方が良いつて、あんたそう言うところは無駄に真面目だから、無意識に結構追い込んでるでしょ?』

『んへへ、ありがと』

『なにが？』

『あたしまだ、真面目だよ？』

『何をー……ったく、今日はまた随酔ってるな……』

『うん、ゴメン……』

『いいケド、帰りは気をつけなよ？　ナンなら家までついてこうか？』

『ああ、ううん、いい、大丈夫だから』

『そう？』

『だーいじょーぶ、何ならもっちゃっとだけ飲も？』

『ンなコト言って……ホントにダイジョブかあ？』

『うん、ダイジョブ』

『ムリすんなよー』

『りよかーい、アイツの分も飲んでやる』

『………』

『……ん？』

『あー……んー、井口』

『え………ゴメン、えと、あー、今度はあたしが失敬……？』

『え、あ、いや……いいよ、こっちも、一応もう半年も前だしね』

『ゴメン、お互い変なモン掘り起こしてバツかだなあ。うん、そこ、もう半年か、ナンか』

『あつと言う間？』

『うんうん』

『飛び降り……だったよねえ、たしか、アイツの母さんから聞いたんだけどさ、婚約も決まってたってさ』

『んふ、なんでかな、いったい、昔から勿体ないコトするヤツだったよね』

『そうそう……』

『ちよっと、ってさ』

『……んー？』

『ちよっと前の事だったのに、ってよく言うけどさ、ホントなっ

てみないと解らないモンだね』

『ん、だね、確かに、そうかも』

『ちよつと前まで一緒にいたはずなのにねえ、たった半年が、もう半年か』

『たった半年で、過去の人、かあ』

『あのさ、なんかさー』

『なに？』

『イキナリだけどさ、あたし、人間ってさ、もっと生きるモンだと思つてた』

『ヤダよ、なにソレ、怖いって』

『ゴメン、でもさ、だけど、さ、まだ爺様婆様になったワケでもないのに、大切な友人が既に一人消えてしまったワケで、あたしの中ではまだ、アイツとお肌の調子とか、ウザい上司のグチとか、そーゆーこと語りながら、こーやってお酒飲んでる姿が用意に想像できるワケで、そう思うと、なんかホントに有島は死んじまったのかって、実感が無いというか、現実味が無いというか、んー、言いたいことがあんまり纏まらないけどさ』

『まあ、ん、解るよ』

『うん、だから、あたしは、まだ有島と飲みたかつたんだって、うん』

『だね、やっぱり飲むか、アイツの分も』

『それが良いかも』

『では』

『うん、アイツに乾杯』

そう言つて、私たちのグラスは宙で交わる。

カランという氷の音は、何処か寂しげで、何処か儚げ。

オレンジがかった照明に、グラスの凹凸が綺麗に反射し、

ソレはまるで、小さな虹のようだった。

本当に、弱々しい、小さな虹。

お酒でうつろな私の目には、それは空のソレよりも、美しく輝いて

いたのかも知れない。

綾瀬と別れ、一人家を目指す私。

終電をギリギリで捕まえ、ゴトンゴトンとゆられ、ふと気がつけばもう家の近くまで来ていた。

火照りきった身体には真夏の夜の風もほんのり涼しく感じ、

お酒に底上げされた愉快的気持ちに、心なしか足取りも軽かった。

だけど、ソレはどうしても消えない妙な感覚、

ソイツは、駅を出た瞬間から付きまとっている。

『……見られてる？』

嫌だな、ストーカーだろうか。

決して姿は見せないモノの、こちらを見つめる、いや睨み付けるほどの視線が、

私の身体に絡みついてくる。

そうになると、自然と足取りは速くなり、

夜空に足音をカッカツとならしながら、私は家への距離を縮めようと必死になった。

歩きが、駆け足に、そしてソレが全力となっても、

その視線はふりほどくことが出来ず、ぴったりと寄り添うようにくっついてきた。

タダタダ、背伸びしすぎたハイヒールが恨めしかった。

アパートまでたどり着いた頃には、酔いも何処かへ置いてきてしまったようで、

先ほどよりも冴えた頭は、少しばかり私を落ち着かせてくれた。

もうすぐ、もうすぐで家に帰れる、

思いだけがどんどんと高ぶり、上る階段は天よりも高い気がする。

ガカンガングンガングンガングンガングンガングン。

ヒールが階段を叩き、金属質の無骨な音を響かせる。
だけど、やだ……。

カカンガンカンカンカンカンカンガンガンガン。
その音は、1つだけではない。

やだ、近い、凄く近い。

前のめりに倒れそうになりながらも、
必死に足を前に出し、走った。

追いつかれたら、どうなってしまうのか、
それは、今の私には解りようもなかった。

そして、私の、部屋。

入れば、流石に追っては来ないだろう。

思わずノブにしがみつき、回すのだけど、
がちや、がちや、と、鍵にひっかかり、ソレは開くことはない。

カカンガンカンガンガンカンカンガンガンガン。

『やだ、鍵いいっ！』

がちやがちや、がちやがちや。

夏なのに、首筋に流れる風が恐ろしく冷たい。

姿の見えぬソイツを怖れ、後ろを向くことははばかられていた。
カンカンカン。

ソイツは来ている、もうソコまで来ている。

必死に理性を振り絞り取り出した鍵は、どうしても鍵穴には刺さ
らなかった。

なんだろうか、こう、背中が重たい。

もしかしたら、もう後ろにいるのかも知れないと、そう思った瞬間、
私の首筋が熱くなり、そして、ソコで私の意識は途切れてしまった。

気がついた私。

辺りは草が茂り、それは見たことのない風景。

身体を起こそうと思うのだけど、ナンというか意識が身体から切り放されたみたいに、

まったく動こうとはしなかった。

私、どうなっちゃったんだろうか……。

不安、不安、不安。

心の中はソレばかりが支配し、

視界に入る綺麗な空が余計に私を心細くさせる気がした。

辺りに響くのは、草のこすれ合音色、鳥の声、そして、微かなノイズが耳にこびりつく。

なに……ナンだろうか？

それは外からではなく、どちらかというと身体の中から響いてくるようにも聞こえた。

おおよそ自然の音ではない、機械的なノイズ、そしてソレはずかに人の声を纏っていた。

《聞……え、ま………かー？》

それは、機械で変えられたような錆び付いた声、男性か女性か、ソレすらも判断することはデキソウにない。

《聞……てま……か？ 聞……てますか？》

『な、なに、誰！？』

《あ、聞……てます？ 聞……え……ら、何か……イン……送………くれる……、ありが……いんで……が》

『何、解らないからっ、誰だって、誰！』

《ん、まあ、その調子……ら聞……てます……ね、っと、え……ハイ、ゲー……の参加、アリガトウ御座……ま……ねー》

『なに、ちょっと待ってって言ってるでしょ、意味が分からないって言ってるの!』

《別に、そっ…に分か…もらう必要は…ですから、私た…は、私…の、やることを……ですか…》

『ココは何処よ、あなたは何処にいるの!? 何か答えなさいよ!』

《あーは…はい、解り…したよ、ソ…はゲーム…中です、で、私はゲー…外にいます、他に何…質問は?》

『ナニソレ? 巫山戯ないでよっ』

《別に、巫山戯て…んか…マセンよ、ニュースとか見……いん…すか?》

『そんなの知らないっ、仮に、ソレが本当だとして、あたしにナンの関係があるのよ!』

《あり…すよー、あな…はゲームのコマに…なって…らいます…ら。とり…えず、見かけ…人…片っ端から殺し…ください、それが、あな…の存在意義で…》

『なに、殺……?』

《あ、ま…別に、こっちで調整してい…んで、何も……くてもかってに身体は動いてくれ…すよ、あなたは見…るだけ…良いです》

『なによそれ……』

《だから、メンド…サイな、えっと、あな…はもうタダのゲーム…プログラムです。だから、もう人じゃな…んですよ、タダの、ゲーム…、構成パーツです》

『そんな………』

《あー、で、ついで…言って…まえば、現実のあなた…もう死んでますよ》

『え………?』

《あなたのプログラム…書き換え…際に、イロイロとめんどくさ…んで切り放しちゃい…した。えと一種脳死みたい…感じですよ。あー、死体の方…ちゃんと処分しておきま…んでご心配なく》

『巫山戯ないですよ……何かってに言ってるの……』

《巫山戯てナンかー、イマセン…って、私たちは、このために長年準備してきたんですから、お望みなら、ほら、分かりやすく、躰で、教えて上げますから》

そう言った瞬間、私の身体が力も入れずに持ち上がった。

そしてソレは私の意思をまったく受けつけることなく、独りで動き続ける。

《えへえ、なかなか面白…ですよー? 思い通りに動きま…ねー》

『うそ………』

《まあ、信じる信じないは勝手…すし、そもそも…あなたが何を考え…うと、私たちにはこれっぽっちも関係ないので…けどね、まあ、勿論あなたの全て…私たちの自由ですから、あなたに反抗する手段なん…ありっこナイのですケド》

『いや……』

《ああ、ちょーど良いと…ろに、プレイヤー、一人そっちに近づいてま…よ》

頭の中の声が言い終わるよりも早く、私の目の前にそして、金髪の少女が現れてしまった。

《ちようど良いの…、テストと行き…しょうか、ほら、ちゃつちや…縊り殺しちゃってくださいよ、せ・ん・せ》

そうして、私の身体がゆっくりと彼女へと向かっていった。そんなウツロな私の姿に、多少不思議そうな顔をする彼女、何も知らず、何も気づかずに、ゆっくりと私の方に近づいて来てしまう。

『逃げて』と、私が叫ぶのとほぼ同時に、

恐怖に歪む暇すら与えず、彼女の顔が、大きく凹んだ。

いくら叫ぼうとも、私の身体はもう止まることはない。

三木伸照 g

『だから、逃げてって、いったのに……』

獣女に殴り飛ばされ、俺の身体は重力を失ったように浮き上がった。先ほども小梅に見えてた死の気配が、

今度は俺にも漂うようになってきたみたいで、

身体が、そして空気が、急に肌を刺すような冷たさを帯びたような、そんな気がした。

それでも、そうなくても、人を殺しかけ、殺されかけても、

やっぱりこの世界には、リアリティなんてモノは、

稀薄なモノなのだと思った。

だって何だか、こうなってしまった以上。

特に恐怖とか、絶望とか、そう言うコトが浮かぶ予知なんて、ほとんど残っていなかったのだから。

そもそもの話だが、死に瀕したことのない俺達に、

コレがリアルかリアルでないか、

そう言ったことを判断する材料なんて、これっぽっちも、微塵も、存在していないんじゃないだろうか。

それどころか、大人ですらも、この現代、死のリアルなんて、生のリアルなんて、

本当に持っているのだろうか？

例えばどれだけの人生を重ねても、その経験の中、存在しないリアル

を、

どうやってくみ取っていくのだろうか。

悲しいほどに子供でしかない自分、だけどまた、世界にどれだけ大人がいるのだろうか、

そしてリアルは、誰が持つのか。

何も知ることもなく、薄れゆく意識の中、耳には、蝉の声が響いていた。

じじじじ、じじじじじじじ、じじじじじじじ。

数日前までは、あんなにも五月蠅かった彼らの声が、

ふと聞こえなくなっただけで、急に寂しくなってしまう。

愛おしく、大切なモノのように思えてしまう。

至って単純で、愚かで、ソレこそ、失って気付く、大切さ。

みたいなモノだけど、

そう感じるソレこそが、確かに本能的に感じる、リアルなのかも知れない。

『ここは……』

じじじじじ、じじじじじじじじじじ。

蝉の声が五月蠅い。

気がついた俺の眼前には、いつものように使い慣れたモニターが置かれていて、

そこは死んでいく毎日を消化した、俺の部屋であった。

『あ、は、はあ……は』

不意に、笑いがこらえきれなくなる。
やっぱり……やっぱりタダのゲームだったんだよ。
きつと、たぶんアレでゲームオーバーだったんだ。
だから、それでもうゲームは終わり。
そうなんだ。

人が死ぬなんて、そんなの勿論、やっぱり、嘘だった。
杭のような剣も、
焼かれた男も、
死んだと言う岸さんも、
死にたいらしい小梅も、
泣かせてしまった父も、
ぜんぶ、ゲームの中の、出来事だったんだと。
嘘だったんだと。

『思うしかないだろうが……ッ!!』

頭を掴むように丸くなり、
しばらくソコにうずくまっていた。

じじじじじじ、じじじじじじじじじじじじじじ。

『ココは何処だよ!』

じじじじ、じじじじ、じじじじじじ、じじじ。

ソコは確かに俺の部屋ではあった。

だけど、ソコにはイッサイの生活音がなく、肌を感じる温度もない、色も、あせたブルーとグリーンとグレーの中間のような、まるで全てが止まったような、そんな空間だった。

『か……かあさん!!!』

返事はない。

『父さん、いないの!!!?』

無い。

『誰でも良いから、いないのかよお!!!』

誰もいない。

じじじじじじじじじじじじじじじじじじじじじじじじ。

部屋には勿論。

家の中にも。

外にも。

商店街にも。

坂にも。

公園にも。

バイパスにも。

駅にも。

コンビニにも。

通学路にも。

学校にも。

人っ子一人、誰も、そして何もいない。

じじ、じじじ。

歩き果て、そして俺はまた、いつものように部室へと向かっていた。正門をくぐり、下駄箱で靴を履き変える。

下駄箱にはクラス全員の靴があり、だがしかしそれら全ての名前がシルされているわけではない。

階段を上る、部室は3階で、校舎のだいたい中央にあった。

いつもは進学者補習でにぎわっていた教室も、

今では誰もいないもぬけの殻。

ただ。じじじじじ、じじじじじ、と。

何処にイルでもない蝉たちが、

絶え間なく、ナキ叫んでいる。

部室の前に立って、ノブに手をかける、

だけど、何でだろうか、開けてはいけないような、

そんな気がしてしまう。

開けてしまったら、最後、全てが終わってしまうような、そんな儚く繊細な感覚。

部室の、この室の中には何がいる？

『なに……やってるんですか？』

急にだが、背中から声がする、人だ。

『ん……あんたは……てか、ココは何処だ』

いつの間にか後ろに立っていた女は、不思議な顔をするものだ、と笑って見せた。

『勿論、ゲームの中ですよ?』

ちよつとばかり期待はしていたので、そう言われてしまうとやはり落胆は隠せない。

『か……で、あんたは?』

『ん、出来れば……あまり名乗りたくはないです』

『なんで』

女は、20代半ばぐらいだろうか、面長で、どちらかというと華奢な感じのお嬢様というか、そう言う感じだ。

口調こそ流暢なモノだが、何処か外人の血を感じさせるその顔は、俺の質問に、ばつが悪そうにはにかんでいた。

『きつと、私が誰かを言うと、あなたは怒ると思うから』

そしてその声は、何故か何処かで聞いた覚えがある。

『なんでさ』

『さっきから、なんでなんでばかり。教えて君かいキミは?』

『いや、はあ、スンマセン』

『ああ、いえ、ゴメン嘘、今の嘘。スイマセンね、からかうこと言ったりして』

『はあ……』

『あなたは、えと、何でこのゲームに？』

『それは……』

『まだ、若そうだもんね、何か変な誘いになっちゃったのかな』

『まあ……はあ』

『やっぱりかあ、いや、ゴメンね』

『………あの、ここ』

『なあに？』

『ここは、どこ？』

『だから……』

『そうじゃなくて、そうじゃない、森とか、林とか、草原とか、
そう言うんじゃないくて、ここは、俺の街だろ、こんなの今まで無か
った、なんでだ？』

『あー、んー、ここは……強いて言うとなんたの中だから』

『俺の？』

『いえす、そうそう、君の中』

『なんでまた』

『んー、多分、一種のバグか何かだと思う』

『バグ？』

『うん、バグ、多分、システムに何かの誤作動というか、一種の
パルスみたいなモノが、ゲームの中に流れてしまったんだと思うの、
プレーヤーの強力な意識とか、そういったモノもこのゲームは電気
信号として拾ってしまうから、まあ、それはゲームの進行には不可
欠なモノなんだけど、きつとなにか、まあ、何か、そう言った感情
？ とても強い感情みたいなモノが、このゲームを狂わせた。それ
で、本来、プレーヤーの来れないこの場所に、何の因果か、あなたは
迷い込んでしまった』

『はあ……？』

『みたいな』

『んー』

『わかった？』

『6割ぐらい』

『まあ、じょーできです』

『あ、で、ここは？』

『なに、また、場所？』

『この部屋の中は……?』

『あーそう来たか、多分、君の……いや、ある種、ある意味、君自身かな』

『俺?』

『そう、おれ。いわゆる君そのものがきつとその部屋にあるんだと思う。君を構成する感情とか、記憶とか、タマシイ以外の擬似的に復元可能な君の全てが、コピーされて、きつとこの部屋の中に入っているの』

『おれの、バックアップみたいなの?』

『うん、それで良いと思う、だから、入っちゃダメ』

『なんで』

『ここは、ソレこそまさに君そのものだから、多分、見たくないモノも、沢山あるんじゃないかな? だから、ソレを見て、君が耐えられる保障なんて、私にはほんのチョットもないからさ』

『……』

じじじじじじじ、じじじじじじ。

『で、あんたは何で、こんなにいろいろ知ってるんだ』

『はは……』

『あんたは、誰？』

じじじじ、じじじじじじじじじじじじじじじじじじじじじじじ。

『んへへ……』

『誰だよ』

『あ……はは、うん、多分、もう解ってるよね………私はこのゲームの設計者の一人』

『……名前は？』

『ジュリエッタⅡジャクソンです』

じじじじ。

ソコで、再び、俺の意識は途切れた。

再び気がついた時、目の前に転がっているのは、足だった。
膝の辺りで切り落とされたソレは、血をふきながら転がっている。
胸の奥から少しばかり酸っぱいモノが浮いて来るも、何とか押し戻した。

『だからッ、なんでッ、あなたがココにいるのよ!!』

声の主は、獣女。
重たく動かない身体が、再び元の場所に戻ってきたことを教えてくれている。
決して喜ばしいことではないが、何か少し……安心したのかもしれない。

叫び声を上げる女の前には、ちょうど、俺と同じぐらいの男が、立っている。

黒い髪、黒い瞳、黒い服装に、相反するような純白の刀身を持つツルギ。

あまり特徴のない、言ってしまうえば冴えない顔立ちが、その姿をより強調させてみせるようでもある。

片足を失い、バランスを保てぬ獣の女は、ソレでもなおその男にかみかかり、

そのまま手を切り落とされた。

痛みとか、そういうモノを持っていないのだろうか、

どれほどバラバラにされようとも、決して引くことはなく、そのまま、バラバラにされていく。

『なんで、あたしが、こんな目にあうのよ！ 何であなたが、生きてるの……っ』

四肢を失い、もはや血をふく胴のみとなった女は、ソレでも這いずるように、短くなった手で地面をかいて、襲いかかっていく。その顔は、どちらかというと、怖れのソレに近く、かつ、涙を湛えてオレンジ色に湿っていた。

『先生……』

男は、何処か寂しげに、女を見下ろす。

『先生は、何にも変わってないですね……あなたは、昔と……』

そう言い、女の頭へと、大きく振り上げた剣を突き立てた。

ふわり、と、女はその身体の力を失い、

ひととき大きな血の柱をつくって、そして、動くのをやめた。

女が死に、死の気配は遠のいていく、

草むらを赤く染めた恐怖も、目の前で死んでいった女への哀れみも、生き残ることが出来た喜びが、

何のためらいも見せることなく、跡形もなく埋め尽くしていった。

『……………小梅……………生きてるか……………？』

『残念ながら……………』

その声は、やはりまだ、ふるえていた。

『で……………』

男が、こちらに剣を振り上げるのが、見えた。

梯凜 a

私は、目が見えません。

ソレは決して、生まれつき見えないわけではなく、正確には見えなくさせられてしまった、と言うソレに近いモノです。

元から光りを持たない眼を、私は知りませんが、

ソレは多分、光を持っていたモノが失われるよりかは、幾分マシなのではないかと、そのように考えてしまいます。

あの日の数日前までは、この眼にしっかりと映っていた全てが、それ以降、まったく映ることもなく、全てが暗闇に閉ざされたその様は、

何とも形容しがたい、苦痛というのもし易しいモノに他なりませんでした。

希望を見出す、その手段すら見出すことが出来ずに、

日々、見えない空を眺める日々が続いていました。

死のう、そう言う選択肢も、幾度と無く浮かび上がりはしたのですが、

目が見えない恐ろしさにすら、身体を振るわせるばかりの私が、どうやって自分の命を絶つことが出来るのか、

予想することすらデキソウにもありませんでした。

日々を繰り返すほど、父や、母や、家族全員の顔も、少しづつ、忘れていってしまうようで、

思い出しても浮かばなくなるその恐ろしさに、

私はただただ怯え続けるのみでした。

そんな私に、わずかな光りを与えてくれたのが、

ヴァーチャルリアリティーによる、仮想の世界でした。

様々な分野で利用されるコノ先進技術は、瞳というレンズを失った私の身体に、新たなレンズを与えてくれました。

脳に直接的送られてくるソノ情報は、眼を介さずともその世界を形作り、

脳が見る幻想のような、そんなおぼろげなモノではありながらも、私に少しばかりの光りを見せてくれたのです。

それは、非常に狭く、偏った世界ではありましたが、

一種、夢のようでもあり、

その中では、私は普通の人と何ら違いなく、生きることが出来たのです。

そんな私に、訪れた、最大にして、最初で最後の機会が、このゲームなのでした。

従来のシステムでは、擬似的な像を脳内に映すのみのモノであり、言ってしまうえば、ソコにあるように感じる、その姿を認識出来るに過ぎないモノでした。

ですが、今回。

久米さんの研究所が開発したソレは、

ほぼ全ての5感を補った、ソレであると教えていただきました。

久米さん、某電子大の教授さんなのですが、

父がソノ社長を務める企業との、資金的、技術的な提携により、以前から仲良くさせて頂いておりました。

時々、私と談話をして下さることもあり、

その際には、世界を大きく変えて行くであろう、電子の世界、その技術、

年齢を感じさせぬその己の研究への熱意を、私にそっと耳打ちして下さいました。

『そうソレでだ、ソノ新開発のヴァーチャル体感システム、ソレ

をだな、えん、キミに……そう、テストというか、ソノ体験してもらいたいのだが……どうかな？』

久米さんは、いつも通りに、多少言葉を詰まらせながら、選りながら、私にその誘いを持ちかけました。

『私に……ですか？』

『そう、そうなんだ、ソノ何と言うかな、いや、危険性はないんだ、ソノシステムはもう完成しているし、そう、私もテストしているしね、だから、そう、ソノ感想というか、うん、スタッフ以外の感想が欲しくてね……それで………』

彼の作り上げた新たなヴァーチャルリアティ―。

それは、究極的に人工的な自然と言いますが、それでも失われた自然界を擬似的に作り出し、

レクリエーションや、憩いの場としても用途を持つ新たな仮想現実。言ってしまうばもう一つの地球。

人類は宇宙などに行かずとも新たな星を手に入れた、と久米さんは嬉しそうに語っていました。

『お願いします』

『ソノ……あ、え、ん？』

『体験、お願いしますね』

私は、一種夢が叶ったように、特に深く考えることもなく、即答しました。

そして、その約束から数週間後、私はこの世界から消えることとなりました。

その日はあいにくの空模様、

覆い被さる曇天の下、私は父の車に乗せられ久米さんの研究室に向かいました。

相変わらず瞳はタダ黒い世界を映すのみで、

振動だけが身体に伝わる車での移動は正直の所、あまり好きではありません。

車が止まっても、父の手につかまり、光を失って以来久しい、大学という場へと足を踏み入れました。

『どうも、ご足労頂き恐縮です』

研究室で出迎えてくれたのは女の人の声。

私に姿は見えませんが、細く芯のあるその声は、きっと美人な方の持ち物だろうと、

ついつい想像を巡らせてしまいます。

『あなたが、榊凛さんですよね？』

相手の見えない私にとって、話しかけられるときは何時も急にであって、

顔の想像など膨らませていたがためか、普段よりも狼狽した返事を返すこととなってしまいました。

『あ、え、あ、はっ、はい』

『あ、スイマセン、目が……不自由なのですよね、こちらにどうぞ、久米はただいま急用で出ているので、代わりに私が、ナビゲーションを勤めさせていただきます』

『ええ、すみません、よろしくお願いしますね』

『いえいえ、ソレでは、ログインの準備にかかりますね、こちらに、はい、こちらに寝ていただいて、お待ちください、はい』

私は決して柔らかいとは言えないベッドの上へと寝ころび、私のカラダへ、そしてソノ脳へと沢山の配線が繋がれていく。その時が来るまで、私は静かに、必死に静かに待ち続けるのでした。ログインは一瞬でした。

実際ではないモノの、カラダを一筋に電流のようなモノが流れ、ソノ世界に入った感覚は、まさに落ちる、落下するといった感じで、光りのない瞳は、ソノ恐怖を更に助長させる結果となりました。そして、地面に降り立つ私。ここが、私の見える世界。

《凜さん、聞こえますか、聞こえますか……？》

『あ、はい、聞こえています』

《順調ですね、本来は、そちらで設定を行うのですが、今回凜さんは操作が難しいと思われますので、こちらが代わりに設定をさせていただきます》

『よろしくお願いします、ご迷惑おかけします』

《いえ、こちらから頼んだことですし……多少お時間頂きますので、そのままお待ちください》

『はい、よろしくお願いします』

正直、私は内心でドキドキしていて仕方なかったのです。

長年現実から突き放されていたような私にとって、失われ続けた感覚が一瞬のうちに蘇るのかと思うと、

その実、昨晚も安眠することは出来ずにいました。

それはもう、赤子が目を開くよりも、ずっと大きな光りが、私に飛び込んでくるのではないかと、

私は誰にバレるだろうかと言うその高鳴りを隠すコト無くに興奮し続けていました。

《完了しました、それでは、コレより仮想現実プログラムを実行します、ごゆっくりどうぞ》

ソノ瞬間、私の瞳に光りが溢れました。

いいえ、溢れるなんて表現が幼稚でしかない程に、吹き付けるまでの光りの奔流が、私を包み、そして通り抜けていきました！

幻でも、虚像でもない、本物のリアルが、私の目の前に広がり、途方もない喜びと、表しきれない感動と、

数え切れない色の美しさが、私の前の前に広がります。

繋がれていたヒモが切れたように、私はあまりにも青々しく茂る木々に駆け寄り、そしてソノ一枚一枚を慈しむように撫でていきました。

私の中にある全ての感覚が、コレは本物であるという喜びを、現実であるという喜びを感じ取っていたのです！

《どうでしょうか？》

『ええ、それは……もう、本当に』

《ですか、喜んでいただき何よりです。えと、お父様とお話があるので、何かご用があれば呼んでくださいね》

何を見ても明るすぎて、何を見ても鮮やかすぎて、感覚が、感動が痺れてしまうのではないかと思うような、その自然。ほんとうに、もう、世界が飛び込んできました。

『誰……ですか？』

背後から人の声、そう、人です、人がいます！

『あ、す、すいません、榊凛と申します。えと、ここの体験をさせていただいてます……』

ソノ人は男性で、黒い髪、黒い瞳、黒い服、そしてなんでしょうが、腰にささる長く白い何かが目を引きまます。

『体験……ですか、そう言うコトになってたんですか』

不思議そうな顔をするその少年、いえ青年？
ココのスタッフにしてはどうにも若い方のように思えました。

『失礼ですが、えと、どなたでしょうか？』

『ああ、スイマセン、人と直接話すのは久々で……いえ、気にしないでください、ここの研究員の身内です』

『……はあ、そうですか？』

『すみませんね、コレと言って珍しいモノもないですよ』

『いえ、いいえ、そんなこと有りませんよっ、あの、私、現実では眼が見えないんですよ、だから、その……』

『眼が……？』

『ええ、ですから、見えるモノ全て、なんか、こう、感動します
というか……なんか上手く言えないんですけど……』

『いえ、ああ、いや、はい………わかります、わかります
よ』

『わかります？』

『ええ、僕も、そうでしたから……』

そう言って青年は少しばかりうなだれて、顔に影を落としました。
そうでした。とは、この子もまた目が見えないのでしょうか、
想像ばかりは膨らむモノの、その顔が持つ寂しげなまなざしは、
なんでしょう、私ばかりはしゃいでいるようで、少し申し訳ない
ような気になってしまいます。

イッタイ何故、この子がこのような顔をせねばならないのか。
お節焼きのようですが、久々に顔を向けて出会えた人間に、この

ような表情をされては。

私は何かして上げないと、と、そのような気持ちがフツフツ沸いてくるのは、自然なことだと思いました。

『あなたは、何故ココにいるのでしょうか？　やはり体験か何かで？』

『いや、まあ他に居場所もないので……』

『……？』

『いや、ごめんなさい』

『謝らないでくださいよ……？』

『いえ、ごめんなさい』

『なにを、そんなに謝っているんですか』

『僕は……』

『あなたは……？』

『どうやらあなたを殺さなくてはイケナイらしくて……』

その瞬間、私の頭の中に、パン、パァン、と乾いた音が響きました。それはゆっくりと私の中で反響を繰り返し、そして、ゆっくりと飲まれるように消えてゆきました。

『ど、どうしたんですか……？』

《あ、アレ、スイマセン、マイク切ってませんでしたね》

『どうしたんですっ?』

《まあ、いいですか………たった今、亡くなりました、あなたの
お父さん》

『な、なにを言っているのでしょうか?』

《側頭部に至近距離からの1発、即死です》

『え……?』

《別に、嘘何かじゃありませんよ、あなたの父は我々の依頼通り
自殺してくれました。さあ、次はあなたの番ですよ、コレでβ版の
テストも終了、何もかも至極順調です》

『や、止めてくださいっ……』

《別に、そんなに怖がらないでも良いですよ、私は見てるだけで
すから、あとは、彼がやってくれますので》

彼。

私が振り向いたソコにいる彼は、
再び悲しそうな顔をして私に謝るのです。

彼はその腰に吊された白いモノに手をかけ、
すらあ、と抜き取りました。

あまりに白く、透き通るように鋭いそれは、私の目に、ひたすら、クッキリと映り込み、自分でも整理のつかない恐怖にも似た感情が、その像を、私に刻まれた最も強烈な記憶として、残そうとしてきます。

『ゴメンナサイ、ごめんなさい』

『謝るなら、止めてくださいッ!』

『ごめんなさい、だけど、やらないと、いけないんです』

『何ですかッ!?!』

『何でもです、僕は、騙されているのかも知れませんが、
今は、こうするしかないんです』

『.....』

『言うんですよ.....殺せて、何人も、何百人も、何千人もの人
が.....』

『.....』

『毎日、毎日言うんですよ』

『.....』

『本当は、違うのかも知れないんですけどね』

『……………』

『だけど、ソレが本当かを確かめるコトなんて、僕には出来ないから……』

『……』

『例えソレが何であっても、それが僕が理解できる真実だから、』

『コレは……本当なんですか？』

『本当です、現実です、少なくとも当事者の僕たちにしてみれば』

『ごめんなさい、解らないことばかりで……どうしたらいいか、解らないです……』

『すいません……』

そう言って彼は、私の頭に向けて、すっと狙いを定め、ソノ白い刃を振り上げました。

『最後に……』

『何ですか……？』

『最後に、名前を聞かせてください……』

『僕の名前は……』

『久米武陽です』

そして、私の中に深く何かが突き刺さる感覚が、
重く冷たい何かが、まるで流れ込むように、入ってきました。

《……はい、対象の死亡を確認、ご苦勞様。β版テストはコレで
だいたい完了ね》

『はい……………あの』

《なに…………?》

『彼女の名前は…………?』

《何、一目惚れ?》

『別に…………』

《なによー……………って、はいはい……………榊凜よ》

『榊凜…………』

《何なら、死体でも大事に取って置きなさいよ》

『……いえ、何でもないです』

再び閉ざされた真っ黒な視界。

永遠に続くハズの闇。

だけどまた自分の命が消えた感覚はあれど、生の感覚も途切れてはいませんでした。

私の目には、ブルーとグリーンとグレーが入り混じったような、そんな世界が一面に広がります。

そして、私は気付きました。

『私の部屋……？』

ソコは、暗闇の中での毎日を過ごした、私の部屋でした。

柳 凜 a (後書き)

三木伸照h

『ま、まてっ……!?!?』

剣を振り上げた男は言われたとおりにその剣を止めた。

『なに……?』

『止めろって……』

『なんでですか?』

『それは……こっちが死ぬだろ』

『そういう、ゲームじゃないですか』

『また、その科白かよ』

『すいません……』

男は少しうなだれた感じで、力無く剣を置いた。

拍子抜けというか、何だか良く分からない感じだが、
明確な敵意があるようには見えない。

興が削がれた、でもないが、とりあえずはこれ以上は襲っては来な

いようだ。

『なんだ、ダイジョブか？』

『はあ……』

『カンベンしてくれよ……ホントにさ』

『すいません……』

『あーお前も、あれだろ、なんかちよっと、浮かれちゃった感じで参加しちゃった感じだろ？』

『……いや』

『学校は？ てか高校生だろ？ 地域とかは？ てかコレって全国ワイドなのか？』

『……』

『良く分かんないヤツだな……』

『いえ……学校には』

『ああ、中退か……まあ、最近が多いしそんな気にするなよ』

『いえ、そう言うわけでじゃ……』

『じゃあなんだよ、ったく、煮え切らないな』

『スイマセン……』

男はどうにも所在なげで、何処かおぼつかない、幼げな印象があった。

矛盾された言いつけをされた子供のように、何をしたらいいのか解らないように。

タダぼつんと取り残された、そんな感じだった。

『小梅……立てるか？』

『……うん、一応は、大丈夫みたい』

『そうか、よかったな』

『……』

投げかけた言葉は皮肉のつもりでもあった、それは、小梅への皮肉でもあるし、また、自分へのソレでもあった。

『で、さあ……』

『……ちよっ、ちよっとまってよ！』

『なに？』

『なんですか？』

『なんで、そんな奴とにこやかに世間話してるの？ おかしいじゃない！？』

『なんでもか言われてもなあ、正直俺も何が起こってるかさっぱりだからさ、もうどうすればいいとか、何やったらいいとか、全然解らないし』

『だって、目の前で、人、殺してるのに……』

『五月蠅いな……じゃなかったら俺ら死んでるじゃないか、生き残ったんだから、もう、いいじゃん』

『だからって……』

良いワケ無いんだけどな、今の俺には、ソレをどうだこうだと判断する力とか、

そういうモノは残されていなかった。

と言うか、考えると、判断だとか、煩わしくなってきた。

『じゃあなんだよ、小梅が助けてくれるのかよ？ 小梅がどうするか決めるのか？ 正直もう全然解らないんだよ、自分のいる状況も、自分がどうなっているのかも、考えることも何も多すぎてさ！』

『ちょっと、落ち着いてよ……』

『落ち着けるかよ、そもそもナンでお前はまだ生きてンだよ！？ ソレだけ怪我してるのにさ、ナンでピンピンしてンだよ？』

『私だって解らないよ！ ほら、みんな解ってないから！ 落ち着こうよ！？』

『くそ、そもそもなんだ！？ ナンのためにこんなコトするんだよ！？ 意味ねえじゃんじゃん！？ こんなコトのためにこんな凄

いモン作ったってのかよ!』

そう、なんかもう、自棄だった。

情報が有り余り、自分の置かれている状況どころか、自分のことすらも解らない。

だけどさ、そんなの、ゲームの中じゃなくたって、毎日そうだった気がする。

考えることが多すぎて、余裕が無くて、

何かに追われて、それでいて追いかけて、
全てが過多していた。

そう言うときは、俺は何時も、寝て、ソイツが過ぎ去るのを待った
り。

サボったり、なーなーと過ごしたり、結局は解決するまで考えたこと
とナンて、そう多くはなかったように思えた。

だから、俺が導き出した答えも、
当然の結果だったのかも知れない。

『もう、さ、俺もうヤメるわ』

『な、何を?』

『このゲーム』

『は……それって』

『別に良いジャンよ、殺さなくたって、殺されなくたって、ホラ、
もう、俺関係ないわ、無関係』

『そんなこと……』

『デキルよ、デキルさ、どうせこのゲームやってるのなんて、お前みたいな死にたがりか、ソイツみたいにロクに会話もできないヤツばっかりだろ?』

『……』

『お前らとは違うんだよ……だから、出来るんだよ』

ショウジキなところ、俺がそいつらとどれだけ違っていたかなんて、まったく解ったことではないのだけれど、生とか、死とか、殺すとか、殺されるとか、罪とか、なんとか、考えることはもう疲れた。

思考停止。

ソレが行き着いた答えだった。

何とかなるさ、とも言う。

この異常な状態に、自分から答えは求めようとはせず、タダ過ぎ去るのを待ち、終わるのを待つ。

もしゲームが終わらなければ、俺達は一生この中で、そして罪に裁かれることもないだろう、ダイジョブだ。

父がナンと言おうと、なーなーと聞いていればいい。

ダイジョブじゃないか。

もし運が悪く、誰かに殺されるようなことがあっても、

ソレはもう、あれこれ考えずにすむし、メンドクサイ全てから開放される、

何も問題はない、ダイジョウブだろ?

情報が多すぎ、そしてまた、その中ではあまりにも無知すぎる自分。ソレをもう、ドウコウしようとは考えず。

俺はもう、選択することをヤメ、余りある情報の波の中を、タダた

ゆたい、泳ぐことをやめた。

『何ならさ、この世界で暮らしたっていいよ』

『さつきから……フザけないでよ?』

『本気だよ、何ならさ、お前達もどうだよ? 一緒にこのサイバ
ーな世界で第二の人生とかさ』

『バカ……』

モチロン、半分は冗談だった。

だけど、残りの半分は本気だった。

何だかんだでココにいる敵、

生きていく上での敵は、他のプレイヤーだけ。

明確で、分かりやすい敵がいるだけ。

後は何もない、日々の苦しみも、悩みも、何もナイ。

心地よい、優しい世界。

辺りを気にし、大人ぶる必要もナイ。

テストも、受験も、就職も、仕事もナイ。

人と人とのすれ違いも、悲しみもナイ。

それこそ、現実に溢れるうざったいあれこれなんて、
これっぽっちも何処にもないのだから。

『それ、良いと思います』

と、男が後押しした。

『ウツソツ!?!』

『本当です』

『いやいやいや……』

『僕ももう、嫌なんですよ、ヤメたいんです』

『なら……』

『ヤメたいんです……』

現実からのログアウト。

もう誰も、俺達に関わることがないように。
見ざる言わざる聞かざるで過ごす。

ここに、俺達の新しい世界を……。

『お前、名前は？』

『……久米、武陽』

『よし、武陽な、お前、剣かせ』

『え……？』

『剣だよ、剣、それ』

『……あ、はい』

『ん、これで、武器はナシだ、殺し合いも、ナシだ』

『はあ……』

『で、じゃ、みんなでやめようぜ、このゲーム』

『やめる……って……ちょっと!?! 私は!?!』

『お前も、まだ死にたいのか? まだ殺し合いごっこにつき合うの?』

『まだ……』

『迷うなよ』

『迷ってないッ!』

『なら』

『そう言う、単純な話じゃないじゃない?』

『死にたいなら単純もムズカシイもないだろ?』

『………わ、解ったよ………少しぐらいつき合う、だから、終わったら、ちゃんと………』

『殺してやるよ、この世界でも生きられナイようならな』

『………』

『また後で、何があったかのか教えてくれよ………』

『………?』

『ナンで死のうとするのか、教えてくれ』

『……………うん』

小梅は少しずつ、普通の女の子に戻っているんじゃないか？

いや、そもそも小梅ははじめっから普通の女の子じゃないか？
つい、そんな気がしてしまう。

女の子に、一緒に暮らさないかなんて、ショウジキ、正気の沙汰ではないが。

なんかもあ、別にブサイクでもないし、
なんだろうか、少し、また、ワクワクしていたなんて。

不謹慎というか、意志が弱いというか、同じような所をループして
いるような気がしてならなかった。

でもまあ、それで良いか。

『お前も、いいか？』

武陽は、何処か寂しそうに、草むらへと視線を投げかけていた。

そして、何かを決心するかのよう、口をキッとキツく噛みしめ、
ソレはまた、何かをこらえているようでもあり、

苦しそうに、また、罪に怯えているようでもあった。

『……………ダイジョブか？』

『え……………あ、ハイ』

『誰かいたか……………？』

『い、いえ、別に……………』

『……?』

『大丈夫です』

『そうか……?』

『やっぱり、一人より、三人の方が楽しいですよね……』

『単純にな』

良く解らないまま、俺達の新生活は始まろうとしていた。

優柔不断で、意志が弱く、それでいて自分を大きく見せることに必死だった俺。

死にたがりで、言い訳がましく、自己本位な小梅。

判断力が弱く、自己を隠し、そしてまた他者を求める武陽。

バカな現代人三人による、ゲームの意図を無視したこの試みは、当然のコトながら、長く続くことなんて、無いと思う。

本来の筋道からそれたこんな生活は、きっと、いずれ、潰されてしまう、

それは、相手がどんなヤツであろうと関係なく用意された筋道なのだろう、

そんなことは解っている。

だけどもあ、もう俺は考えるのを止めた。

ソレはやっぱり、それが一番楽だったからだと思う。

知って痛いより、知らなくて痛くない方がいい。

やっぱりその方が、楽なんだと思う。

とても簡単なこと、ナンで気付かなかったのかと言うほどに簡単なこと、

だけどもあ、人間、そう簡単には変わらないようだ。

小梅の過去。

正直なところ、興味を持ったのは下心からでもあり。

何だかんだで優しくしておけば、何時かなびいてくれるんじゃないかと、

冴えない男なりに色々と画策していた。

確かに一種の哀れみや、誰が、そして何が彼女をあそこまで追いやってたのか、

イッサイの関心を持たなかったと言えばウソだと思うが。

まあ結局の所彼女は、今時なんら珍しくもない、引きこもりの女学生であり。

路傍の石のような、そんな人生ストーリー。

万に一つ、億に一つと言うほどの、そんな悲しい人生では、決してなかったと思う。

傷つきやすいか、繊細か、そして彼女は死にたくなった。

もしかしたら呆れてしまうほどに、やっぱり彼女は普通だった。

普通の、哀れな女学生だった。

他人の人生なんて、ソレこそもう、星の数ほどに溢れた、大量生産されるモノだと思っていた。

1つ1つにドラマチックな展開なんて用意されてなどおらず、

誰もが、同じようなことで傷つき、痛みを背負っている。

そういうモノだと思っていた。

そんな当たり前のこと、だけど、俺は、それでも結局、

そんな痛みを大切にしたかったのだと思う。

潮崎二郎b

『ネットゲーム殺人についての最新の報告会をコレより行います』

三木さんが中心となり、調査が進められる今回の事件。

ゲームの参加者の搜索、久米豊、白瀬響子クレンペラー両名の搜索。多くの人員を投入し、連日に渡り続けられるそれは、思いの外進展していないのが現状であり、

俺と三木さん、その他の事件に関わる刑事達が、それぞれの苛立ちと焦り、そしてそれ以上の疲れを漂わせて署の一室に集まっていた。

『まず、参加者と思われる人物のうち、現在身元が判明しているモノについて報告します』

『以下発見された順番となります。三木伸照、小川町高校の一室にて発見、ジュリエッタさんの協力によって会話が可能な状態でしたが、現在音信不通となっています』

『岸留美子、都内のネットカフェにて発見、既に死亡が確認されています』

『目黒優平、本人の他、家族も行方が解らないとの連絡があり調査したところ、彼を除いた一家3名の刺殺体と共に発見、状況から推測するに恐らくは彼による犯行かと思われます』

『沢木英治、PCの接続状態から恐らくはゲームに参加していたと思われますが、ネットワークコネクタの外れた状態で倒れているところを家族が発見、死亡が確認されています』

『片岡まき、神崎優衣、両名とも片岡まきの自宅にて家族が発見、生存が確認されています』

『佐藤紀光、会社への通勤が無いところを我々が搜索したところ発見、遺書も共に見つっていますが、現状では生存が確認されています。また彼の娘である優佳ちゃんもゲームに参加していることから、一種の無理心中かと思われます』

『上田栄生、同じく会社への通勤が確認されていないところを自宅で発見、現状で生存。ちなみに佐藤紀光とは同じ職場であることが確認されています』

『東間京太郎、自営業で数日間店が閉められていると言う連絡があり、調査したところ発見、同じく遺書が見つっていますが、また同じく生存中です』

『また、直接的な関連性は不明ですが、都内在住の井口小百合さん、綾瀬規子さんの両名が、それぞれ数日前から帰宅していないと、アパートの管理人と、芸能事務所のスタッフからそれぞれ連絡が来しています。両名は失踪の同日に都内の居酒屋で会っていたとの連絡もあり、その後行方が解っていないと思われます』

と、そこまで聞いてそれを纏めるように、俺は軽く相づちをうつ。

『まあ、現状で確かなのは8人か……まあ、定員まで参加していない可能性も十分あるが』

『はい、今後は搜索範囲を関東全域から全国規模へ広め、広く情報収集を行う予定です。……ですが固定されたデスクトップからな

らともかくノートPCでの接続や、体内インプラントによる無線接続が成されていた場合は、発見は難航すると思われます』

『……解りました。それで、久米豊と、白瀬響子の方は……？』

『はい、こちらも両名とも搜索を続けていますが、残念なことにソレに関係する情報はほぼ0に等しいです』

『随分と上手く隠れた、か、コレも搜索は都内限定で？』

『いえ、関東周辺を重点的に全国的に協力呼びかけています』

『ですか……これはまた……』

難儀なことだ。

周囲の刑事からも落胆の声が漏れていた。

事件に関係すること、その全てが曖昧で現実味のないこの件に、誰もが暖簾に手押し、手応えの無さを嘆いていた。

『すいません、少し失礼します』

『どうしました？』

『いえ、現場から呼び出しで、ちょっと出てきますよ』

モチロン、ウソだったのだが。

俺は携帯に出る素振りを見せつつ、会議室の重い空気を飛び出した。

先ほどの伸照君との最後の交信、いろいろと不気味な情報がチラホ

ラしていた。

とりあえず俺は屋上で、煙草に火を付け空を眺める。
高いビルが周囲にはないせいか、街が随分と広く眺められ、ソレはまたその全てが人の営みであり、人のいる証であり、俺達が守らねばならないモノらしい。

ようやくのコトで若手から抜け出し、何となく部下からは慕われる不良刑事のような俺だが、

少しずつ、そう言うコトも実感を持てるような気がした。
気がしたんだがな。

喜ぶべきコトなのだが、素直に喜べない俺がいた。

『不良刑事さんは、会議サボって屋上で一服ですか』

後ろからの声、振り返った先には数日前から連絡の付かない女性がいた。

『ジュリエッタさん……どこ行ってたんですか？』

『あ、いえ、少し本部に呼ばれまして、数日間署を開けて申し訳ありません』

『ですか……まあ、俺は別にいいんですけどね、良いんですケド……この状況で消えられると色々ね、消えてる人が多い事件ナンで、連絡ぐらいい入れてもらえると嬉しいですね』

『連絡、入れてませんでしたっけ？』

『ええ？ まさか、入れたつもりでしてなかったなんて……』

『いや……ちょっと、そうかもしれませぬ……』

『はぁ……ですか………まぁ、こちらも色々と有りましたよ?』

『進展が?』

『ええ、とびきりビックな』

『それは、良い方で、悪い方で……?』

『どちらとも、言い難いですね、少なくとも私には』

そう言って俺は腕を組み直し、煙草の火を消して彼女へと向き直った。

この日差しの下でも色白な彼女の顔には、不安と期待が入り混じったような、
一種怪訝な表情が浮かび上がっている。

『と言うと……?』

『久米武陽が生きています』

『……』

『そして、彼は今三木君達と共に行動しています』

『武陽君が……伸照君達と……?』

『はい、後、もう一つですね、あなたには悪い知らせかも知れませんがね』

『というと?』

『三木君がゲーム内でジュリエッタⅡジャクソンと名乗る人物と遭遇したそうです』

『えっ……………?』

その瞬間、彼女の顔が青ざめた。

合ってから長い付き合いではないが、彼女もこういう顔をするのかと、

そう思うほどに、ソレは焦りと、そして根底からの恐怖を滲ませている。

『今、下でも議題に上がっているはずですが、どういうコトでしよ
うかね?』

『ちょっと、ちょっと待って下さい……』

『単純な同姓同名でしょうか?』

『待って下さい……』

『……』

『恐らくは、その女性が……女性ですよね? 白瀬響子クレンペ
ラーだと思えます』

そう言う彼女からは、既に先ほどの表情は消えている。
淡々と情報を整理した顔で、そう告げた。

『ゲーム中に彼女が?』

『制御側なら、ログアウトも任意で可能でしょう、目的は解りませんが、はい、多分恐らくは、私の情報を知っているのも、外部ではあまりいないと思いますし……』

『……解りました……あと』

『ナンでしょうか?』

『いえ、これは三木君からの報告ではないんですがね、白瀬響子、久米豊の両名を調べている間、有島月読という人物の名前が上がってきたのですが……どういうコトかその時期のゼミ生については写真も資料も、何も残されていないようで、と言うか紛失扱いになってましてね』

『ええ、確かに、資料については知りませんが……有島さんも当時の研究室のメンバーでした。彼女含めて私たち3人しかゼミにいなかったせいで、久米教授が変な噂を立てられたりとか、良くしていましたよ……』

『そうですか、いえ、同じゼミ生なのに何故彼女の名前は上げられなかったのかと思ひましてね』

『ああ、そうですね……彼女は、もういないので』

『と言いますと?』

『自殺しました、半年前に。投身自殺だと聞いています』

『そうですか……スイマセン。……まあ、こちらとしては言っていただけの方が良かったですがね……』

と言うものの、彼女は返答もせず空を見上げたまま、惚けたようにつぶやいていた。

『結婚も決まっていて、幸福の真ん中にいたはずなんですけどね……』

『ジュリエッタさん……？』

『あ……れ……ああ、いえ、スイマセン、つい』

そう言う彼女は、軍人と言うよりも普通の20代の女性のようにだった。

俺が知るよりも、よっぽど多くの顔を持っていそうなこのジュリエッタという女性。

軍人の顔、学生の顔、若者の顔、女の顔、どれもが本物の顔とか、ニセモノの顔とか、そう言うのではないのだろうか、

今の奴等はワリカシそういうモノを持ち合わせているようで、まあ、俺もそうか、

有る程度はソレを使い分けつつ生きているんだろう。

それでもまあ、だけど、
本当の顔、ソレはいくら覆い隠そうとも、到底隠せるモノではないはずだった。

そうして彼女は20代の女性の顔で話を続けていく。

『良い子だったんですよ、明るい子でしたし、面倒見も良かったですし』

『彼女とも、文通か何かを?』

『いえ、卒業後は、年に一回会うか会わないか、そんなところだったと思います』

『こんな話で申し訳ないですが、彼女が……今回の件へ関係している可能性は……?』

『解りませんね、正直の所。もともと3人の中では比較的久米とも関連性の薄い人間だったので、有り得ないとは言いきりませんが、可能性としては、あまり無いかもしれません』

『そうですか』

『イロイロと、敏感な子だったんですよ』

『と言うと?』

『社会の流れとか、人の流れとか、時代の流れとか、一番世間とか、世界とか、自分を取り巻く環境に真剣な子だったと思います』

『成る程ね……そりゃしんどいな……』

『いや、スイマセンね、こんな話ばかりしてしまっ』

『いえいえ、こちらも事件の情報収集ですし、警察だって軍人だって人の子ですから、知り合いが亡くなればいろいろあるでしょう』

『……ありがとうございます』

そう言って彼女は頭を下げた。

そう言う彼女を見ながら、こう言ったことを言うのも気が引けるが、せつかくの機会だと思う、聞けることは聞いておくべきだろう。

『それですが……そんな直後に、こんな質問で申し訳ないのですが』

『はい……?』

『本当に、ジュリエッタさんは今回の件に、関係していないのでしょうか?』

『……と言うと?』

『いえ、容疑者と思われる人物に、名前を名指しされたようなモノですからね、こちらの情報も相手に漏れているか、もしくはあなたに……恨みか何か、そんなモノがある可能性も否定できませんし』

『ああ、そう、ですね……』

『思い当たるフシは?』

『……少し……考えておきます』

『解りました』

ちょっとばかりサボるつもりが、正直の所仕事を増やす結果となつてしまった。

白瀬響子クレンペラー、久米豊のみならず。

その同期、有島月読、そしてジュリエッタ・ジャクソンか。

とりあえずは、二人の経歴など、身元など手を回せるダケの情報には触れておいた方が良さだろう、

こんな事件なんだ、常識の範囲での捜査では、きっと足下をすくわれる。

それこそ、彼女が言うには、俺は命がけの捜査をしているのだから。

『夏も、そろそろですね』

セミの声もだんだんとか細く心もとないモノになってきて、ソレはだんだんと、秋の空気を引き込んでいくようだった。

『随分と……』

『なんです？』

『いやあ、もの悲しそうに言うものだね』

『大学は、休みが長いんですよ』

『ああ、成る程』

『皆とも、いろいろあったんですけどね、今はもう、こんなにバラバラですよ』

と言って、彼女はクツと背伸びをした。

まだ仄かにその暖かさを残す夏の風が、さっと彼女の髪をすくい、通り抜けていった。

『さあ、そろそろ仕事に戻りますか、あんまり屋上で話していて

もバレちゃうでしょうしね』

『ごもつともです』

と、そこで、俺の携帯が振動した。

『あ、失礼………ああ、俺だ………え、あ、ああ、解った………すぐに行く』

『どうしたんです？』

『サボってたら、本当に現場からお呼びがかかったちゃいましたよ』

『と言うと？』

『都内の河川敷から死体が上がりました』

『……』

『黒髪、顔の特徴から、恐らくは、白瀬響子クレンペラーかと思われます』

潮崎二郎b(後書き)

潮崎二郎 c

『嘘、ですよね?』

彼女はその言葉を望むように、蚊の鳴くような声でつぶやいた。

『勿論、断定とは言えません、ですが、あなたの指定した彼女の身体的特徴、それにあの写真に見られる特徴など、ほぼ全てが一致しているそうです。可能性としては非常に高いですね』

『だって、だってそんな……』

『お気持ちは解ります、ですが』

『嘘ですよ……』

『あなたが取り乱したところで、何も解決はしません』

なだめようと言葉をかけるモノの、彼女はまるで、何か押さえ付けていたモノが外れたように取り乱し、

半ば発狂してしまったかのように呆然と、だけど、だって、だが、と繰り返していた。

それは、彼女にとってのクレンペラーという人物がどのような存在だったのかを示しているようで、俺には到底解りようもないそう言った二人の繋がりを、象徴しているようにも見えた。

『ジュリエッタさん……』

『まっってください、だけど、ですけど……』

彼女への問いかけは全て虚しく宙を漂い、そして彼女は俺に何かを説得するかのように、大きく手を振り上げて、襲いかからんとする勢いで迫ってきた。

『ジュリエッタさん!』

俺は彼女の手を掴み、そうして彼女を落ち着かせる。

彼女の振りほどこうとするソレを押さええて、そうして落ち着かせる。初めは強く暴れていた彼女も、次第に大人しくなっていた。

『私はコレから現場に向かいます、ジュリエッタさん、あなたはどうしますか?』

『いえ、いや………はい、行きます。会いに行きます』

『でしたら、落ち着いてください、現場に行けば状況は間違いなく今より酷くなります、ですから』

『はい………すいませんでした。ですから………』

そうして彼女は何かを噛みしめるように、頭を垂れた。

その金髪が風になびき宙を舞うが、先ほどのような余裕は俺にも、そして当然彼女にも無いのだった。

現場は署から一区画ほど離れた田園地域にあった。

署よりも都心から離れたソコは、まだまだ夏の香りが色濃く残っており、

青々とした草木が風になびく姿を、そこかしこで見ることが出来る。死体が発見された河川は田圃の集まる中心部をまっぴたつに割るように流れており、

周囲こそアスファルトで固めてあるモノの、細い川幅や雑草が伸び荒れ放題の姿はどちらかというと水路に近い姿をしていた。

水もまた、浅くはないモノの緩やかな流れで、よくよく見ればその中を数匹の小魚があちらこちらへと動き回っている。

ソコが見えるほどの透き通っているというわけでもなく、見方によっては緑色にも近いその流れは、山の向こうへ側へと長く長く続いているのだった。

河川周辺は既に集まっていた警察の車両で封鎖されており、立ち入りを制限する黄色いテープが道を横切っていた。

『潮崎さん、こちらです』

ワイシャツ姿な若い男の誘導に従い、俺たちは車を河川のわきに止め、

河川へと降りていく。

ボウボウと伸びた草むらと、グズグズ不安定な足場を下っていくと、ソコには凸凹とした大きなブルーシートが横たわっており、

その中身は伝えられることは無いにしても、十分に理解することが出来た。

川沿いに立って指示を出していた短髪の男が、こちらに気付いたのか近づいてくる。

『あれ、ジュリエッタさんもごらんになるんですか……？』

『と言うと？』

『ああ、いえ、なにぶん損傷が酷いモノで……かつての同僚と言うなら尚更のことと思います。私個人の意見としては、あまりごらんにならない方が……』

『構いません』

『ですが……』

『構いませんので、お願いですから』

そう彼女は言い切り、制止する男性の脇をすり抜けてブルーシートを見下ろすように立った。

そうして一瞬息を吞むように、心の準備を整えるようにし。

中身に気を使うように、ゆっくりとシートをはぎ取った。

ブルーシートの向こうからは女性の顔が出てくる、

正確には女性の顔だったと言う方が適切かも知れない、腐敗臭が漂い、長い黒髪も多くが抜け落ちたその姿は、筆舌しがたいモノだった。

彼女は始め、少し小さな悲鳴のようなモノを上げた。

それは死体に対する当然の驚きのようでもあり、またかつての同僚の変わり果てた姿への反応かも知れない。

実際の所は解らないが、そうしてまた呼吸を整え直し、彼女はソノ亡骸を凝視した。

『解りますか……？』

『はい……確かに、恐らくは、彼女ですね』

今度は取り乱すようなことはなかったが、呆然とした虚ろな姿は変わりはない。

こちらに顔を見せないように、黙祷を捧げるかのように何事かを

ぶやいていた。

『まだ、断定は出来ませんが……そうですね、今DNA鑑定も行っていきます。大学時代の採血サンプルが病院の方に残っていたそうなので、そう時間はかからないと思います』

そう、男が付け足し最後に、

『後のことは我々が行いますので、ジュリエッタさんはいかがでしょうかお休みください』

そう言って、半ば強引にシートをかけ直した。

彼女は少しばかり慌てたようにブルーシートへと手をかけるが、諦めたのか軽くなだれ、そうして振り返ることなくきびすを返す。河の土手を上る背中に俺は声をかけるべきなのかと、自問をしていた。

そんな気配を感じ取ったのか、彼女は顔だけ振り返り、

『お言葉に甘えて少し休ませていただきます。何か有ればまた連絡をください』

とだけ言い残し視界から消えた。

その場に残った俺は、とりあえずは状況の把握だけでもしておこうと先ほどの刑事を呼び止めた。

『で、発見した当時の状況は？』

『ハイ、第一目撃は周辺住民でした。人が河に浮いている……みたいな内容で通報が入って、まあ、近間の我々が駆けつけたところ、こんな感じです』

『そっか、聞き込みも？』

『はい、近隣の住宅に……といってもそんなに無いんですけどね、目撃情報が取れなさそうで、色々と難航しそうです』

『かあ、だが、まあ、死んでるって事は』

『他殺でしょうね、死体には錘もつけられていましたし、首には絞められたようなアトがあります。不敗ガスが溜まったせいでしょうかね、沈めていたのが浮いてきてしまったのかも知れません』

短髪の刑事はそう言って写真を何枚か差し出す。

正直言って、俺もあんまり見たくはないのだが、とりあえず申し訳程度には目を通しておいた。

首もとの写真が異なる角度から2、3枚、それとつけられていたという拳ほどの石の入った錘が同じく2、3、その他にも顔やら何やらと全部で10枚ほどだった。

『久米かな……余計話がこんがらがってきたなあ』

俺は写真を返し、ダレにとでも無くつぶやいた。

『ですね、私もなかなか満足に寝れませんよ』

そう男は拾って返し、うつすらと苦笑いを浮かべる。

『参るよ、まるで映画かなんかみたいだ。今でも本当にこの事件は起こってるのか、疑いたくなってくるね』

そう言って俺はぼりぼりと頭をかいた。

清々しい風が吹き、徹夜のたたりか激しい眠気と、アクビが込み上げてくる。

『とりあえずはこちらは我々で処理しますので、潮崎さんは風呂にでも入ったらどうです？』

『ああ、イイ考えだな、もしもの時は素っ裸で駆けつけてやるよ』

『解りましたよ、でも仮眠ぐらいはしてくださいよ、倒れられてもこっちが困りますんで』

『わあったよ、とりあえず三木さんへは俺から連絡しておくから、まあ、ココはよろしくと言うことで』

『了解です』

そう言って短髪の男もアクビを1つ、眠たそうな目を擦って軽く手を振った。

ジュリエッタは先に帰ったようで、車もそのままに河川敷に止められていた。

今はまだ静かにしておいた方が良さのかも知れない、仕方なく俺は自分で運転席に座り、署への道を引き返した。

署に戻った俺は終わりのかけの会議へと滑り込み、さぼりの口実を真実に変えて報告を行った。

話を聞く誰もが同じような表情をして、一体どうなっているのかと口々に小声で言い合った。

一人は苛立ちが限界に達したのか、おもむろに煙草に火をつけ始め、またある一人は途中で席を立ち、そのまま帰ってこなかった。

三木さんもまた目頭を押さえ、深く濃厚なため息をつく、

そうして散々な結果で締めくくり会議は閉じられた。

唯一明確だった追うべき対象すらも失い、再びスタート地点近くに戻された俺は、正直ふて寝する以外やるが見あたらなかった。

数時間後、DNA検査の結果が来たと連絡が入った。

俺は飛び起きて、電話へと向かう。

その先には先ほどの短髪刑事がイライラした態度を隠しもせず待っていた。

『ああ、で、結果の方は……？』

『ええ、参りましたよ本当に、どうしましょうか』

『どうしたんだよ』

勿体ぶるような仕草に結論を急かすと、刑事は少し小声になりこんな質問を返してくる。

『ジュリエッタさんはソコには？』

『今はいない……どうしたんだよ本当に』

電話の向こうから聞こえてくる刑事の安堵が、事態の深刻さを物語っているようだった。

『今言いますよ。驚かないでくださいね……確かに河川で死亡していた人物は写真の人物と同一人物でした』

『なら……』

『ですが、肝心なところが違うんですよ』

『何が？』

『名前です』

『ナニ、名前？』

『河川敷で死亡していた人物の名前はジュリエッタⅡジャクソンです』

言われた瞬間に、背中に悪寒が走る。

ジュリエッタⅡジャクソンが既に死亡している、その事実が示す答えは何だ。

河川敷で死亡したジュリエッタ。

ゲーム上に出現したジュリエッタ。

そして、先ほどまで俺の隣にいたジュリエッタ。

既に3人のジュリエッタがこの事件には絡んでいた。

『くそ……！』

携帯を開き彼女へとダイアルをするも返答はない。

『出るよ、出る……』

『大学にナニも資料が残っていなかったのも、もしかしたらもしかするかもしれませんがね。どうします？ コレは公表するわけには行かないでしょう』

『くそ、ダメだ、生きてる方のジュリエッタには連絡が取れない！』

『もしもし、聞いてますか！？』

『ああ、聞いているよ、クソ！ どうしろってんだよ！』

彼女は言った、この事件で俺は死ぬかも知れないと。

壁際の電話に対し喋っている自分が、背中を部屋に向けていることが恐ろしく感じた。

慌てて壁に背を向けて、拳銃に手をかける。

とっさに伸ばした手が、電話台上のメモ帳をはじき飛ばした。クソ、一体どうなっているんだ。

ジュリエッタ、アイツは今どこにいる。

何処で一体、ナニをしようとしている。

この事件は一体、何処に向かっていると言うんだ？

上田榮生 c

『んーワリといけるな』

と、私たちは森で捕まえた野ウサギで、かなりサバイバルな食事をとっていた。

日頃から、P Cに向かい続ける毎日の反動からか、興味半分で身につけたサバイバル知識がまさかこんな形で役に立つとはこれっぽっちも思っではいなかった。

『まあ、とりあえず何か腹ごしらえしよう』

コレはゲームだから。そんな彼女に対処しかねた私はとりあえず話題を逸らすことにした。

いろいろと聞きたいこともあるが、とりあえずソレは急ぐことでもないと思った。

『え、でも、ナニを食べるんです？』

『んー、いや、なにがいるか分かんないけどね。ナンか少しぐらいは食べれるモノでもいるんじゃないかな？』

『え、ど、動物ですか……？』

『なに？ 肉とかダメ？』

『いや、かわいそうかなって……』

人間の死には鈍感でも、動物の死はかわいそうとそう言うコトらしい。

決して解らないことではないが、解りたくはないコトである。

とは言え、見知らぬ人間とは言えどソノ死の直後に吞氣に腹ごしらえなどと言ってる私も、

十分に飼い慣らされているとは思うのだが。

『そう言ってもねえ……なんか果物とかになってないのかな、てかココのモノって食えるのか？』

『あ……』

『ナニ？』

『やっぱり良いです』

『なにが？』

『いえ、動物で』

『そう？』

『はい、いえ……はい』

野ウサギは、実にあっけなくつかまった。

罾を仕掛けたでもない、増しては猟銃を持っているわけでもない。

野生生物としての本能が無いかのように、追いかけられたソレは逃げる素振りすら見せず捕まった。

気持ちばかりの黙祷をした私は、彼女の武器らしい小柄なナイフを使い、ソレをサバク。

先ほどまで動いていた兎が、すいすいと肉のブロックへなっていく様を、

少女は目を覆いながらも凝視していた。

皮を剥がし、肉を食べやすいように細かく切断する。

『まさか』

『ん？』

『兎だとは思ってませんでした……』

『んー、兎好き？』

『いえ、学校で飼ってるんで……ちよつと』

『そうか、ごめんな』

そう言ったところでフト疑問がよぎった。

はたしてこの兎は生きているのだろうか。

ゲームの参加者は生きてる。

それは当然と言えば当然なのだが、

外部のソレではないこの兎は一体ナンなのだろうか。

どこから来た、イッタイ何の兎なのだろうか。

兎が喋ればな。

馬鹿馬鹿しいとは思いながらも、

そうすれば、君はナンなのか？ と聞くこともできるだろう。

もつとも、こんな状態なってしまつてはソレもムリだろうが……。

『と、こんなモノか』

『凄いですね……料理得意なんですか？』

『んー、まあねえ、お前みたいな田舎モンは料理の1つでも出来なきゃ女に相手にされないー、って、母さんにイロイロどやされてね』

『へえ、それで』

『うん、まあ、兎自体は初めてだけどね、本では何回か見たことあつたかな』

『へえ……』

『よし』

『はい？』

『どうしよっか？』

『ナニがです？』

『いや、火がないこと忘れてた』

『ああ……』

我ながら考えの足りないモノだった。

少し考えればガスコンロや蒔きすらないコトなどすぐに気づけたはずなのに。

サバいてしまつてからでナンだが、どうしようかという視線を兎へ向けてみると。

ナニも映らない黒い瞳がじっと見返している。

流石にこのままつと言うのは気が引けるモノがあつた。

『仕方ない、熾すか、野生はナマだとイロイロとマズイだろうし』

『熾すって、どうするんです？』

『あれ、あるじゃない、くるくる回すヤツ？ あーゆーので』

『それは、まあ、そう言うのもありますケド……アレって思った
ほど簡単じゃないですよ？ やったこと有るんですか？』

『あー、うん、まあ、何回かはね、とは言っても子供の頃に田舎
の友達と巫山戯半分でやったダケだけど、まあ、お隣サンが火事にな
りかけたコトもあったし、とりあえずはつけることは出来るんじ
ゃないかな』

『はあ……』

『ナニ？』

『ナンか、こう意外と』

『ん？』

『いや、やんちゃな方なんだなって……』

『悪かったね……』

そう言えば久々だな、最近は、当然のこととは言え、こういった遊
びをすることもなくなった。

当時の友達も、今では皆都心へと出ていき、
実家の野山も、少しずつではあるが数を減らしていると聞いた。
そう言えば、私はある約束を思い出した。

先月、久々に同郷のみんなが集まることとなった。
4人が4人とも、皆異なった人生を歩んでおり、
そしてコレも当然のことだが、皆すっかりと大人になっていた。
そして約束をしたのだった。今度みんなでキャンプにでも行こうと。
久々にみんな、野山を走ろうと。

『まあ、死ねないよなあ……』

くると木の枝を回しながら、ぼやいていた。

『どうしました？』

『ん、いや、まあこっちの話』

『そう、ですか……』

『そう言えばさ』

『はい？』

『君の名前、まだ聞いてなかったよね……？』

『あ、はあ……まあ』

と、言葉を濁す彼女は妙に慌てている気がした。
もじもじと指をくんだり解したり、
変な汗をかいていた。

『何?』

『いや、別に……』

『……?』

『お兄さんは……?』

『ん?』

『名前です』

『ああ、私? 上田栄生、まあ、上田の上田に、栄養の栄に生きるの生』

『健康的な名前ですね……』

『そう言う感想は初めてだ』

『そうですか』

『ん、で、君は?』

『あー、いや、んー……』

『なんだよ、言いたくないの?』

『いや、あの、成富です……』

『名前は?』

『み、充子……』

『うん、普通、かな?』

『ふ、普通ですよ?』

『いや、てっきりとんでもない名前なのかと』

『ああ、いや、まあ』

『なんだよ』

『いえ、別に……あ……っ』

彼女は半ば裏返った声を上げ、
私の足下を指さした。

『何?』

『け、煙、出てます!』

『お、マジか、なんか、アレだ、燃やすモノ! 早くっ』

『え、ちょっと、そんな急には……』

『あ、ま、消える!? ちょっと待て!』

『え!?!』

『違う、お前は待たないで良いんだ!』

『な、なんですかいったい』

『いや、良いんだ、いや、あんまり良くない!』

『わかりませよう!』

取り乱す私たちを笑うように、風がさっと吹き抜けて、ほんのわずかに、赤い点となっていた火種も、じうと色を失っていた。

火照っていたカラダもすうっと熱が冷めたように、

そして私のカラダにも、じんじんとした疲れだけが広がっていった。

『消えちゃったか』

『消えましたね……』

彼女もストンと地面へ座り込む。

『よし、休憩』

『ホントに……昔出来たんですか?』

『出来たさ、出来ハズ、まあ、年かね』

『ですか……』

『なんかねえ、もっとこうさ、パツとつけられないものかね、何

だかまあ、ガスコンロって凄いなア』

『凄いですね……』

『なんか、パツとかあ』

『はい、ぱつと……』

『か……』

『あれ?』

『ん、今度はどうした？』

『有ります、たぶん、パツとつくやつ』

『あるの？』

『はい、“魔法”で』

『あれ、あ、ん、あー、そうか、これゲームなんだっけ？』

『はい、多分使えますよ私』

『おお、そりゃ良い、じゃあちやちやと……』

『どう、しました？』

『いや、んー、ちやちやとかあっと思っ』

『はい？』

『いや、まあちやちやとつけちやって良いのかなって……さ』

『と言うと？』

『折角ならさ、手でつけたいじゃない？』

『ああ……』

『分かんないかなあ、やっぱり』

『いえ、解らなくは……無いです』

『んーまー、も一回やってみる？』

『あ、やるんですか？』

『うん、まあ、せっかくの機会だしさ、やりたいじゃん、つけた

いじゃん』

『……』

『嫌かな？』

『いえ、やってみます』

『そう』

兎だった肉の塊は、思ったより美味しそうな匂いを上げてくれた。
結果的に言ってしまうえば私は火はつけることが出来ず。

最終的には彼女の“魔法”に助けてもらったことになった。

彼女が力を込めると、火はあつと言う間に燃え上がり、薪を包んで、そしてまたチラチラとした火の粉を振りまいた。ようやく燃え上がった炎に、彼女は嬉しそうにするモノの、どうしても私は、難しい顔を崩すことが出来ずにいたのだった。ニセモノの火。

だったら本物は？ と、そう思うのだけど。

いくら赤く、紅くアカく燃えていようとも。

彼女の炎は決して熱そうには見えないのだった。

ふと手を伸ばしそうになり、その温かさに背筋が冷たくなる。

ああ、もう何処にも“本物”はないんじゃないだろうか、

と、不意に寂しさが襲うのだった。

『ダイジョウブですか？』

『ああ、ん、ダイジョウブだ。ダイジョウブ』

『そろそろ焼けると思いますよ』

『ああ、美味そうだ』

と、地面に刺した串を手に取り、もう一度だけ軽く頭を下げた。

彼女もソレにならうようにペコと頭を下げ、そして、頂きますと、つぶやいた。

『んーワリといけるな』

『ですね、兎なんて聞いて初めはビックリしましたが、美味しくです』

『だよなあ、私もこんな美味しいとは思わなかった』

辺りはゆっくりと暗くなり始め、

そしてまた、ソレに合わせるように火は揺らめき、そして私たちの顔を茜色に染めた。

揺らめきは、少しずつその照らし方、光り加減を変えていき。

彼女の顔も、まるで燃えているように刻一刻とその色味を変えるのだった。

『ねえ』

『なんですか？』

『いや、君はさ、何でこんなゲーム参加したの？』

『こんなって……別にそんな理由なんて無いですケド？　ただ…

…やりたいから？』

『理由もないのに……？』

『はい、まあ、兄に紹介されたんですけどね、面白そうだからやって見ればって、だからまあ、そんなやる理由みたいなのが必要なゲームなんですか？』

ソレを聞いた私は、うっかりと兎の串を取り落としそうになった。

ああ、知らないのか。

この子は知らないのだ、このゲームが何なのかも、あの男がナンだったのかも。

そしてまた、自分がどうなるかも知らないのだ。

彼女の兄が何を思っただめたのかは解らないが、

少なくとも、彼女はこのゲームをやるにあたっての必要な知識は何一つとして持ち合わせていないのだろう。

なんだろう、やるせない。

本当に、やるせない。

『ほんとは、そろそろ一旦抜けたいんですけどね、ちょっとどうやるのか解らなくて……』

そう言っただけ彼女は少し自嘲気味に笑った。

ソノ笑みが持つ意図こそ、実際のソレとは異なるものの、その表情は私には耐え難く、視線を合わせることは出来なかった。

上田栄生 c (後書き)

読み進めてくださった方々ありがとうございます御座います。

少し半端な区切りですが、とりあえずは2章はココで終了、とりあえずの一区切りとなります。

1章終了時と同様に過去の部分の推敲を行いますので、次回更新までのブランクができると思いますがご了承ください。

まあ、6月は個人的にも忙しく休日があまり取れないのですね……。

また、推敲により多少内容に変化が出てしまう場合も十分に考えられますが、

出きる限り、私の思う最良の状態で提供したいという思いからですので、

こちらまもご了承くださいけると有りがたいです。

それでは、ありがとうございます御座いました。

感想などもお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0374d/>

LOGOS EX MACHINA

2010年10月11日16時31分発行